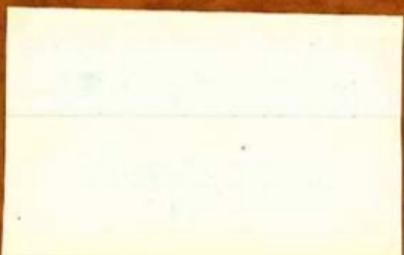


山梨県韮崎市

金山遺跡
下木戸遺跡
中道遺跡

県営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1986

韮崎市教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県韮崎市

金山遺跡
下木戸遺跡
中道遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

韮崎市教育委員会
峡北土地改良事務所

序 文

本報告書は、昭和60年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された金山・下木戸・中道遺跡の報告であります。

韭崎市は、有史以前より古代集落として栄え、縄文時代中期の坂井遺跡、古墳時代の坂井南遺跡、奈良～平安時代初期にかけての中田小学校遺跡、又、古代甲斐国に置かれた官牧の一つである秘坂の牧が在り、中世においては武田氏発祥の地として武田信義館跡、白山城跡、武田勝頼築城による国指定史跡新府城跡など、数多くの文化遺産が散在しております。これらの背景には、塩川・釜無川の二大水系による肥沃な山梨県屈指の穀倉地帯があることは周知の事と思われまふ。今回は、塩川右岸の通称藤井平の一部を圃場整備するに当り、埋蔵文化財が確認され、調査・報告に至りました。本遺跡からは、縄文時代後・晩期、平安時代初期、平安末～中世にかけての貴重な資料が多数得られています。これらの資料が、先人の生活文化等の解明の一環となればと思うと同時に、永く後世に伝えることを責務と痛感致します。

最後に、今回の調査及び報告書作成に当り、多大なる御理解と御協力を頂いた関係者の皆様方に深甚なる謝意を表します。

昭和61年3月31日

韭崎市教育委員会

教育長 岩下俊男

例 言

1. 本書は、県営圃場整備事業に伴う、金山・下木戸・中道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、岐阜県土地改良事務所負担金、文化庁・山梨県の補助金を受け、韮崎市教育委員会が実施した。
3. 本書の編集は、山下孝司・榎本勝、執筆は〔総説〕〔各説〕を山下・榎本、〔総括〕を山下が行った。
4. 遺物・図面整理は、調査参加者が主体に行った。
5. 凡 例

- ① 挿図中スクリーントーンは焼土を表わす。
- ② 挿図断面図の  は石を表わす。
- ③ 縮尺は各挿図ごとに示した。
- ④ 歴史時代土器断面白抜きは土師器、土師質土器等、スクリーントーンは陶磁器を表わす。

なお、発掘調査及び報告書作成に当たり、諸先生方の御指導・御助言をいただいたので、次に御芳名を記して、感謝の意をしたい。

末木健・新津健（山梨県教育庁文化課）、雨宮正樹（高根町教育委員会）、山路恭之助・深沢裕三（須玉町教育委員会）、榎原功一（大泉村教育委員会）、平野修（白州町教育委員会）、畑大介（甲斐丘陵考古学研究会）、小野正文・八巻与志夫・中山誠二（山梨県埋蔵文化財センター）、信藤祐仁・伊藤正幸（甲府市教育委員会）、宮沢公雄（山梨県考古学協会）

調査組織

1. 調査主体 韮崎市教育委員会
2. 調査担当 山下孝司
3. 調査参加者（含遺物・図面整理）
岡本嘉一・小田切まさ子・小田切絹枝・鈴木きく江・小沢高恵・小沢みよの・小沢久江・小沢千代子・志村よし子・志村冴子・岡本保枝・乙黒きくゑ・小沢栄子・小沢春代・五味ゆき子・榎本勝・土橋きよみ・堀直子・小田切玲子・金子昭悟・名取克正・古屋勝・梶本宏・馬場一・砂長完郎・高橋佳子・雨宮実・小池和仁・平賀久二男・秋山健二・三井健二・斉藤きよ・今福美由紀・内藤ちまり・小林巧・箭本太 他
4. 調査協力 韮崎市圃場整備室
5. 事務局 韮崎市教育委員会社会教育課
教育長 岩下俊男、課長 雨宮高、係長 真壁静夫・雨宮勝己、 円道芳美、下村貞俊、
岡本康之

目 次

序 文
例 言
日 次
挿 図 目 次
図 版 日 次

【 総 説 】

I 調査に至る経緯と概要	1
II 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の立地	
2. 周辺の遺跡	
III 遺跡の地相概観	2

【 各 説 】

I 金山遺跡	6
II 下木戸遺跡	14
III 中道遺跡	16

【 総 括 】

I 発掘調査の成果とまとめ	45
1. 金山遺跡	
2. 下木戸遺跡	
3. 中道遺跡	
II 藤井平における弥生文化の波及について	46
1. 編年的位置づけ	
2. 山梨県における土器の推移	
3. 藤井平における弥生文化の波及	
4. おわりに	

引用・参考文献

図 版

挿 図 目 次

第 1 図	金山 1・中道 2・下木戸 3 遺跡と周辺遺跡	3
第 2 図	金山遺跡位置図	4
第 3 図	下木戸・中道遺跡位置図	5
第 4 図	金山遺跡全体測量図	7
第 5 図	金山遺跡土城群	8
第 6 図	金山遺跡出土遺物	9
第 7 図	金山遺跡出土遺物	11
第 8 図	金山遺跡出土古銭	12
第 9 図	金山遺跡出土遺物	12
第 10 図	金山遺跡石塔	13
第 11 図	下木戸遺跡土層図遺構	14
第 12 図	下木戸遺跡出土遺物	15
第 13 図	中道遺跡全体測量図	17
第 14 図	1 号住居址	18
第 15 図	1 号住居址出土遺物	19
第 16 図	2 号住居址	19
第 17 図	2 号住居址出土遺物	20
第 18 図	3 号住居址	20
第 19 図	3 号住居址出土遺物	21
第 20 図	4 号住居址	22
第 21 図	4 号住居址出土遺物	23
第 22 図	5 号住居址	24
第 23 図	5 号住居址出土遺物	24
第 24 図	土 城	24
第 25 図	集石遺構	25
第 26 図	集石遺構出土遺物	25
第 27 図	遺構外出土遺物	27
第 28 図	遺構外出土遺物	28
第 29 図	遺構外出土遺物	29
第 30 図	遺構外出土遺物	30
第 31 図	遺構外出土遺物	31
第 32 図	遺構外出土遺物	31
第 33 図	遺構外出土遺物	32
第 34 図	遺構外出土遺物	33
第 35 図	遺構外出土遺物	34
第 36 図	遺構外出土遺物	35
第 37 図	遺構外出土遺物	36
第 38 図	遺構外出土遺物	37
第 39 図	遺構外出土遺物	39
第 40 図	遺構外出土遺物	40
第 41 図	遺構外出土遺物	41
第 42 図	遺構外出土遺物	42
第 43 図	遺構外出土遺物	43
第 44 図	遺構外出土遺物	43
第 45 図	遺構外出土遺物	44
第 46 図	浮線網状文土器文様モチーフ	46

図 版 目 次

- 図版 1 金山遺跡遠景、1号土壇、2～6号土壇
- 図版 2 金山遺跡発掘風景、出土古銭、出土遺物
- 図版 3 金山遺跡石塔他
- 図版 4 下木戸遺跡配石、出土遺物
- 図版 5 下木戸遺跡出土遺物
- 図版 6 中道遺跡遠景、1号住居址、1号住居址カマド
- 図版 7 中道遺跡2号・3号・4号住居址
- 図版 8 中道遺跡5号住居址、土壇、集石遺構
- 図版 9 中道遺跡1号・2号住居址出土遺物
- 図版 10 中道遺跡3号・4号・5号住居址出土遺物
- 図版 11 中道遺跡集石遺構出土遺物、発掘風景、遺構外出土遺物
- 図版 12 中道遺跡遺構外出土遺物
- 図版 13 中道遺跡遺構外出土遺物
- 図版 14 中道遺跡遺構外出土遺物
- 図版 15 中道遺跡遺構外出土遺物
- 図版 16 中道遺跡遺構外出土遺物

〔 総 説 〕

I 調査に至る経緯と概要

昭和60年度県営圃場事業実施にともない、本市教育委員会では韭崎市圃場整備室から依頼を受け、事業予定地区を昭和59年度に試掘調査を行い、遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、城北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課・市教育委員会で協議を行い、金山・下木戸・中道の三遺跡について、圃場整備事業に先立って、延面積7000㎡以上を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

発掘調査は、昭和60年8月後半より開始し、約3カ月半行った。引き続き、遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が完了したのは、昭和61年3月であった。

II 遺跡の立地と環境（第1図）

1. 遺跡の立地

金山遺跡は、山梨県韭崎市中田町中条字金山地内、下木戸遺跡は、山梨県韭崎市中田町小田川字下木戸地内、中道遺跡は、山梨県韭崎市中田町小田川字中道地内に所在した。

韭崎市は山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的に略山・台地・平地の3地域に分けられる。塩川右岸の氾濫原は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓西端の断崖と、七里ヶ岩台地東側の片山とはにさまれた低地性平地で、通称藤井平と呼ばれ、地内を貫流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯となっている。また、『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、板井、中條、下條、並崎等ノ数村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地帯は平坦地の様相を呈しているが、地形を観察してみると、たび重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることが判る。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、金山遺跡は標高約404m、下木戸遺跡は標高約426m、中道遺跡は標高約428mの水田下に発見された。

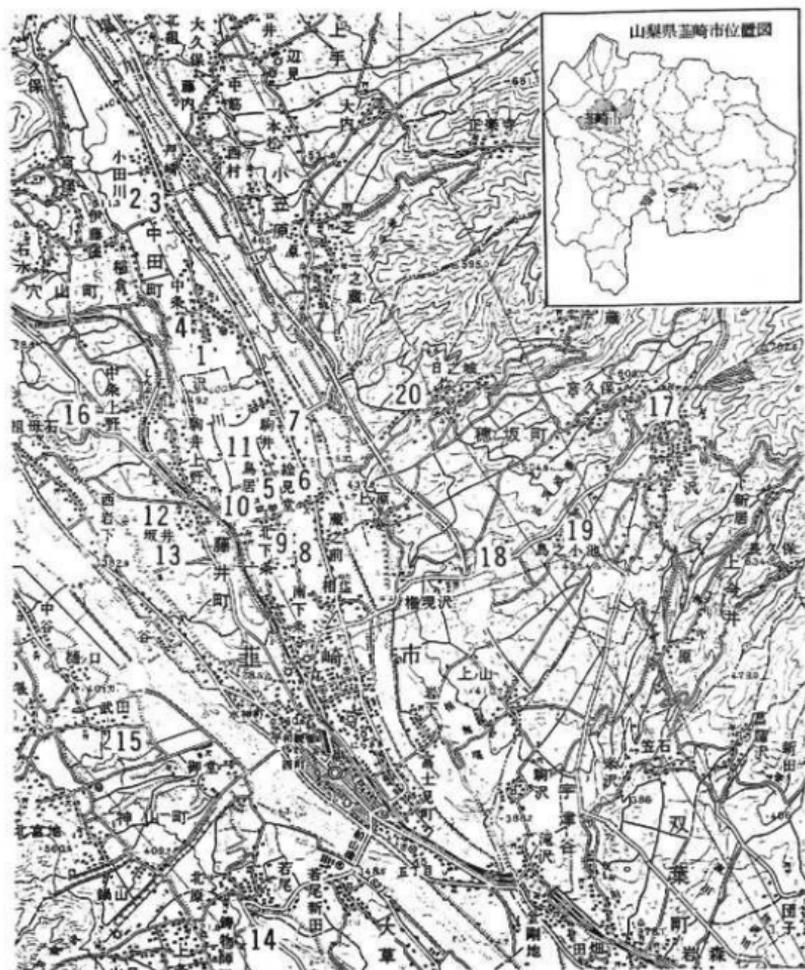
2. 周辺の遺跡

番号	遺 跡 名	時 代 区 分	備 考
1	金 山	中 世 ～ 近 世	昭和60年度 韭崎市教育委員会調査
2	中 道	縄文晩期・平 安	昭和60年度 韭崎市教育委員会調査
3	下 木 戸	平 安	昭和60年度 韭崎市教育委員会調査

番号	遺跡名	時代区分	備考
4	中田小学校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 葦崎市教育委員会調査
5	堂の前	平安	
6	宮の前	縄文・平安	
7	駒井	平安	昭和60年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
8	北下条	弥生～平安	昭和57年度 葦崎市教育委員会調査
9	殿田	弥生	
10	後田	縄文・弥生	
11	坂井 I	縄文	
12	坂井	縄文前期～晩期	志村滝蔵「坂井」 地方書院 昭和40年
13	坂井南	古墳前期	昭和57～60年度 葦崎市教育委員会調査
14	久保屋敷	古墳前期	昭和58年度 山梨県埋蔵文化財センター調査
15	武田信義館跡	中世	
16	新府城跡	中世	
17	飯米場	縄文	
18	女夫石	縄文	
19	鳥之小池	縄文	
20	宮ノ下	縄文	

Ⅲ 遺跡の地相概観

金山遺跡は、中田小学校から400m程南側の、日当りの良い微高地で、北側には集落が形成され、南は藤井小学校まで広がっている。微高地の頂上部は、本遺跡よりも東側にあり、遺跡西側は緩傾斜の地となる。調査区域東端において、土層を観察すると、上位から下位に、耕作



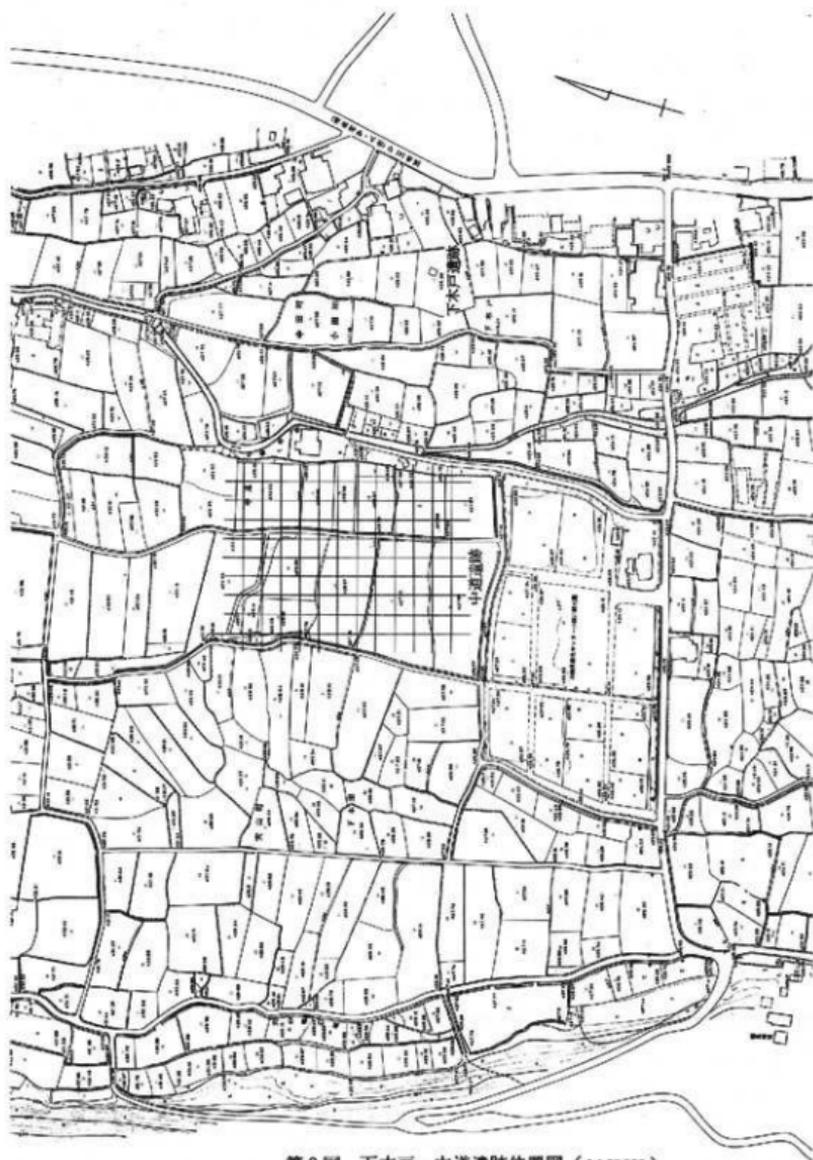
第1図 金山1・中道2・下木戸3遺跡と周辺遺跡(1:50,000)

土・水田床土・褐色土層・砂礫層・砂層・黒褐色土層・黄褐色砂層の順に堆積がみられる。遺構は、黒褐色土層中に掘り込まれているが、遺物の出土は、その上の砂層中からみられる。それらは、磨滅を受けており、今は昔の氾濫の状況が推察される。

下木戸遺跡は、山梨県緑化センター小田川緑化園東側に位置し、地形的にみると、塩川と藤井堰に挟まれた南北に細長い微高地上に位置しており、東側には国道141号線に沿って集落が



第2図 金山遺跡位置図 (1:30,000)



第3圖 下木戸・中道遺跡位置圖 (1:30,000)

形成されている。試掘穴断面による土層観察によると、上位から下位に、耕作土・水田床土・黒色土層・赤褐色砂層・灰褐色砂層・黄褐色砂層・黒色砂層・灰褐色砂層の順に堆積がみられる。遺構は、地表下約1mの黒色砂層中から掘り込まれていた。

中遺跡は、山梨県緑化センター小田川緑化園の北側の日当りのよい微高地で、西側に穴山亀石塚、東側に藤井塚が流れている。遺構の掘り込まれている土層は、水田床土直下の暗褐色土層中であつた。調査区域西側水田下は、黒色土層と石・砂利層で水が濡く、調査区域中央部水田下には石の層が発達し、その東側の水田下には暗褐色土、さらに東側は砂層、砂礫層となっている。これらは旧河川の複雑な氾濫によるものであろうか。

〔各説〕

I 金山遺跡（第4図）

1. 遺構（第5図）

調査の結果、土壌が6基発見された。

〈1号土壌〉

調査区域北側に位置する。長径1.2m、短径1.1mを測り、平面形は楕円形を呈する。確認面からの深さは、約37cmを測る。埋没土は、1褐色土層・2明褐色土層・3暗褐色土層・4褐色土層（若干の焼土粒子を含む）といった堆積状況。出土遺物はみられなかった。

〈2号土壌〉

調査区域南端に位置する。2～6号は集中して遺存していた。規模は約85cm×約1.2mで、平面形は長楕円形を呈する。確認面からの深さは、約27cmを測る。埋没土は、1暗褐色砂質土層（骨片と思われる白色粒子・カーボン粒子を含む）・2しまりのある暗褐色砂質土層の順に堆積している。出土遺物はみられなかった。

〈3号土壌〉

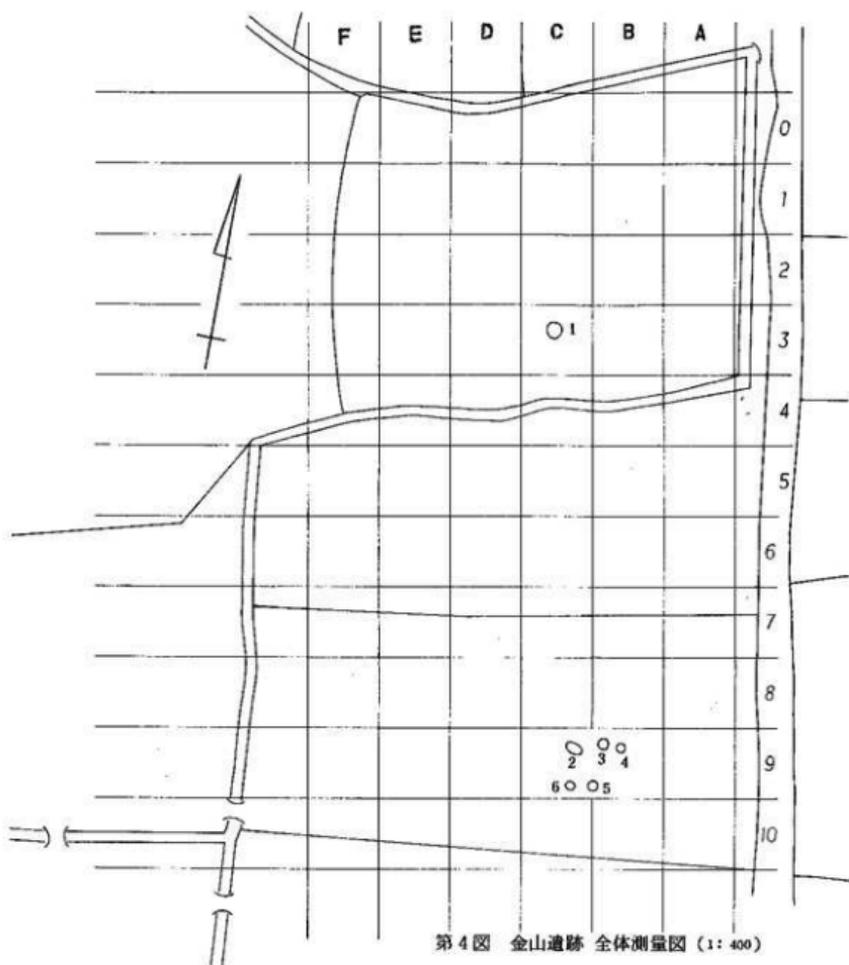
調査区域南端に位置する。規模は直径約90cm前後で、平面形は不整形円形を呈する。確認面からの深さは、約30cmを測る。埋没土は、1暗褐色砂質土層（若干のカーボンを含む）・2暗褐色砂質土層・3黒褐色土層・4黒褐色土層（粘性アリ）・5黒褐色砂層（小礫を含む）・6茶褐色土層といった堆積状況。出土遺物はみられなかった。

〈4号土壌〉

調査区域南端に位置する。規模は直径80cm前後で、平面形は略円形を呈する。確認面からの深さは、約20cmを測る。埋没土は、1暗褐色砂質土層・2暗褐色砂質土層（黄褐色砂質土を含む）の順に堆積している。古銭が一枚、壁際から出土している。

〈5号土壌〉

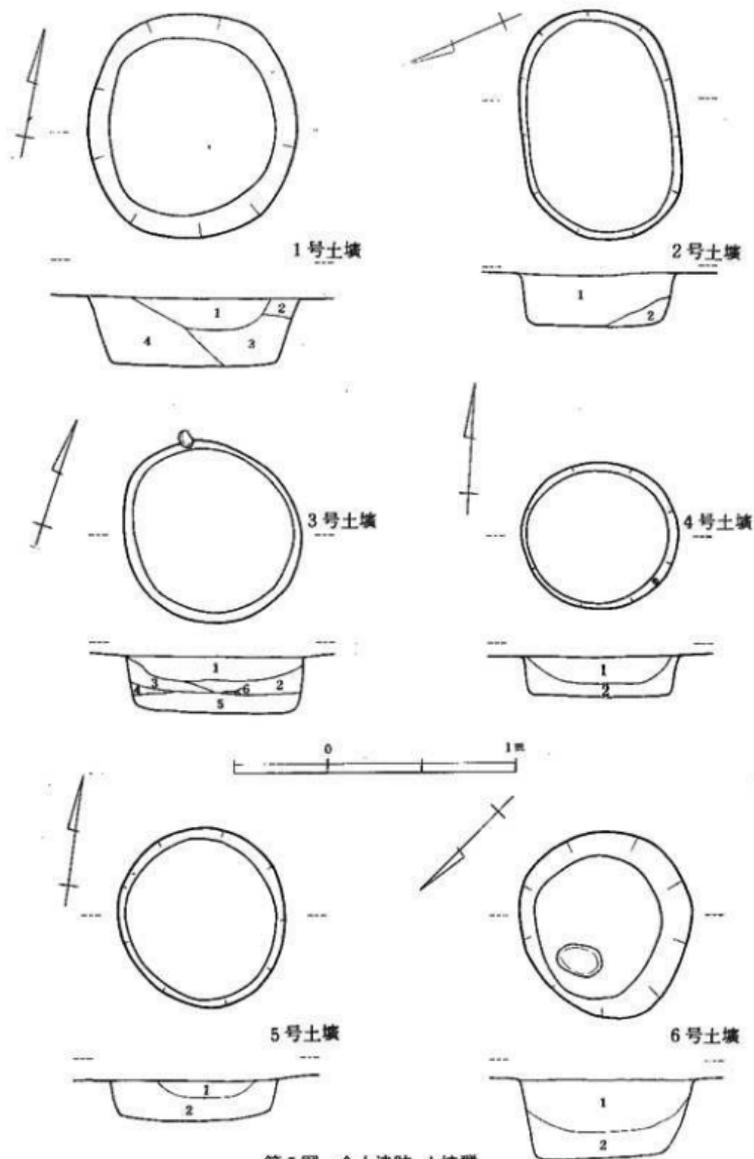
調査区域南端に位置する。規模は直径90cm前後で、平面形は不整形円形を呈する。確認面か



らの深さは、約22cmを測る。埋没土は、1暗褐色砂質土層・2暗褐色砂質土層（黄褐色砂質土を含む）の順に堆積している。出土遺物はみられなかった。

〈6号土壌〉

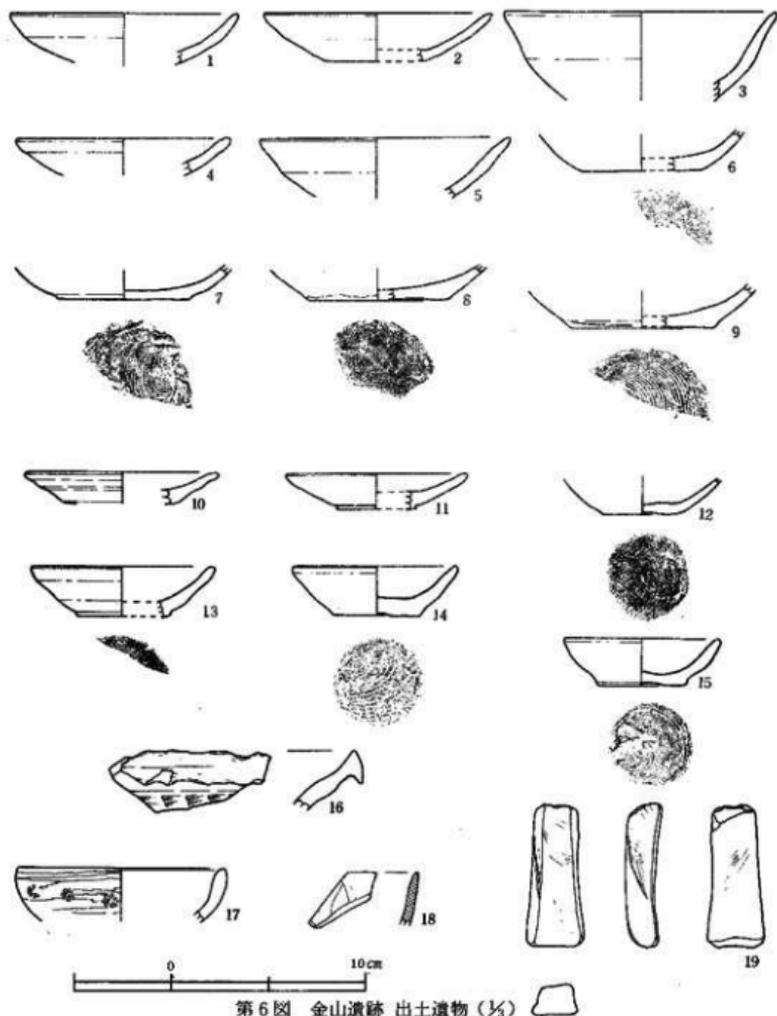
調査区域南端に位置する。規模は約90cm×約1mで、平面形は不整形を呈する。確認面からの深さは、40cm前後を測る。埋没土は、1暗褐色砂質土層・2暗褐色砂質土層（黄褐色砂質土を含む）の順に堆積している。出土遺物はみられなかった。



2. 遺物

本遺跡では、遺構からの遺物の出土はほとんどないが、遺構外から数多く土器片が出土している。ここではそれらの内、形状の把握できるものについて、紹介してみよう。

また、土器片以外の出土遺物として、古銭等があり、他に水田の畦（A-4 グリッド付近）に石塔が置かれてあったので、合わせて図化した。

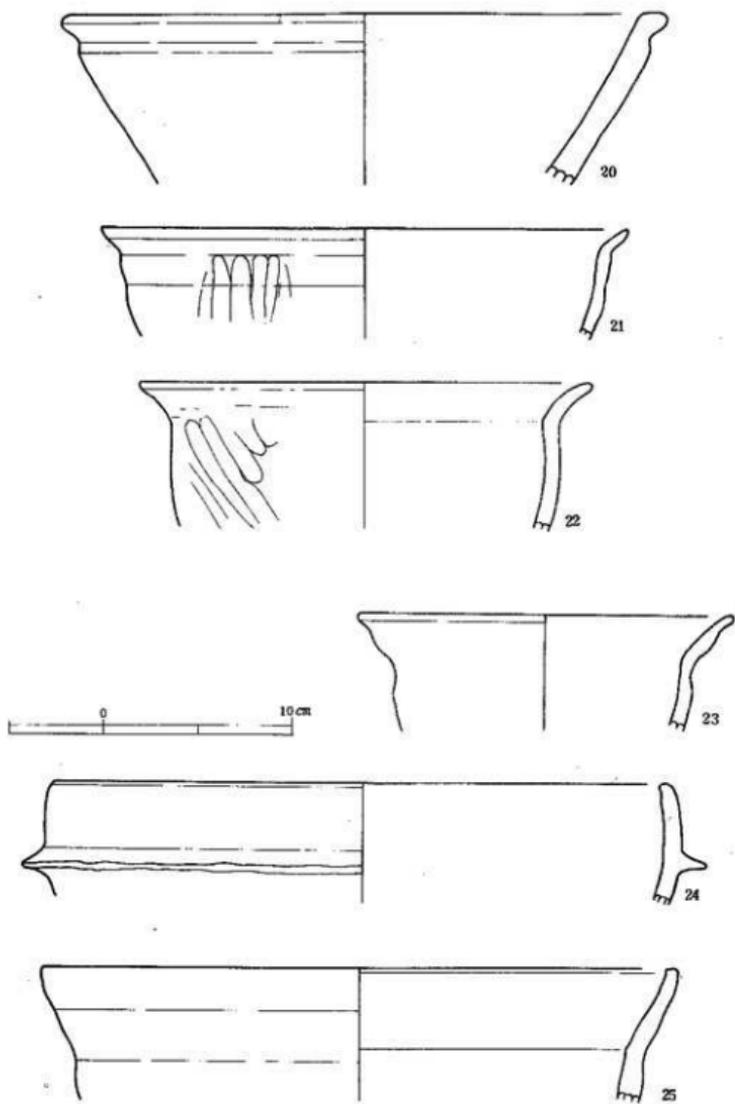


第6図 金山遺跡 出土遺物(片)

出土遺物一覽

(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他	
			器高	口径	底径				
1	土師質	皿	—	12	—	砂粒少量含む	赤褐色	ロクロ水挽	
2	土師質	皿	2.5	11.8	5.4	砂粒を含む	灰褐色	ロクロ水挽 底部 回転糸切り	
3	土師質	杯	—	14	—	金雲母を多く含む	茶褐色	ロクロ水挽 底部なし	
4	土師質	皿	—	11	—	微砂粒を含む	赤褐色	ロクロ水挽	
5	土師質	杯	—	12.8	—	金雲母を多く含む	茶褐色 褐色	ロクロ水挽	
6	土師質	杯	—	10.6	6	砂粒 金雲母を含む	暗褐色 黒色	ロクロ水挽 底部 回転糸切り	
7	土師質	杯	—	—	6.8	微砂粒を含む	灰褐色 黒褐色	ロクロ水挽 底部 回転糸切り	
8	土師質	杯	—	—	7	砂粒を含む	白褐色 黒色	ロクロ水挽 底部 糸切痕	
9	土師質	杯	—	—	7.4	赤色粒子を含む	赤褐色	ロクロ水挽 底部 回転糸切り痕	
10	土師質	皿	1.6	9.6	6.8	金雲母を含む	暗褐色	ロクロ水挽	
11	土師質	皿	1.9	9	4	精製土	赤褐色		
12	土師質	皿	—	—	4	砂粒を含む	赤褐色	ロクロ水挽 底部 回転糸切痕	
13	土師質	皿	2.6	9.2	4.8	砂粒少量含む	赤褐色	ロクロ水挽 底部 糸切り	
14	土師質	皿	2.6	8.2	4.6	若干の砂粒を含む	赤褐色	ロクロ水挽 底部 回転糸切痕	1/4欠損
15	土師質	皿	2.5	7.8	4.5	精製土	茶白色	ロクロ水挽 底部 回転糸切痕	完形
16	須恵器	甕	—	—	—	白色粒子をわずかに含む	明灰色		
17	土師質	埴型	—	10.6	—	微砂粒を含む	赤褐色	ロクロ水挽 外面 横ヘラ磨き	
18	青 磁	—	—	—	—		白青緑色		
19	磁 石	—	—	—	—		黄褐色	全面に使用痕	
20	土師質	壺	—	29.2	—	砂粒を含む	暗褐色 灰褐色	口縁部 横ナデ 内面 ヘラナデ	

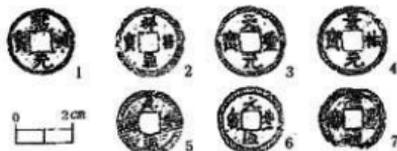


第7図 金山遺跡 出土遺物 (ㄨ)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調 (外面 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
21	土師質	甕	—	27.6	—	砂粒を含む	黒褐色 外面 へら削り 口縁 横ナデ 内面 横ナデ
22	土師質	甕	—	23.2	—	砂粒を含む	明褐色 外面 へら削り 内面 横ナデ
23	土師質	甕	—	19.4	—	砂粒を少量含む	茶褐色 口縁部 横ナデ 外面 胴部棒状工具による磨き
24	土師質	羽釜	—	31.6	—	微量の砂粒を含む	茶褐色 輪づみの後横ナデ
25	土師質	内耳	—	32.2	—	砂粒を含みざらつく	黒褐色 明褐色 内外面 共に横ナデ

古 銭

土壌内から出土したものは、1だけであるが、いずれも墓壇に納められた類であろう。素材は銅であるが、母銭・通用銭・鋳銭の別が判然としないので、鑄造年代は古銭の名称によることとし、以下に示す。

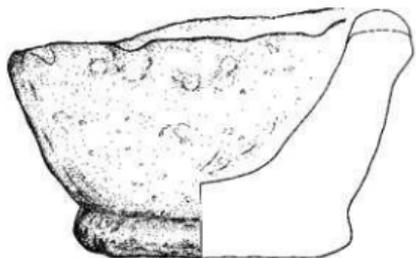


第8図 金山遺跡 出土古銭(1/2)

- 1 熙寧元豊(真) 北宋熙寧元年(1068年)・2 祥符通寶 北宋大中祥符2年(1009年)
3 天聖元寶(真) 北宋天聖元年(1023年)・4 景祐元寶(真) 北宋景祐元年(1034年)
5 元豊通寶(真) 北宋元豊元年(1078年)・6 元豊通寶(真)・7 元豊通寶(篆)

石 皿

安山岩質の石材でつくられ、法量は器高約17cm・口径約26cm・底径約19cmを測る。内面はすり鉢状に掘り窪められている。反対側が破損しているので断定はできないが、片口をもつ。石皿と思われるが、内面下半に煤が付着しており、ヒデバチと

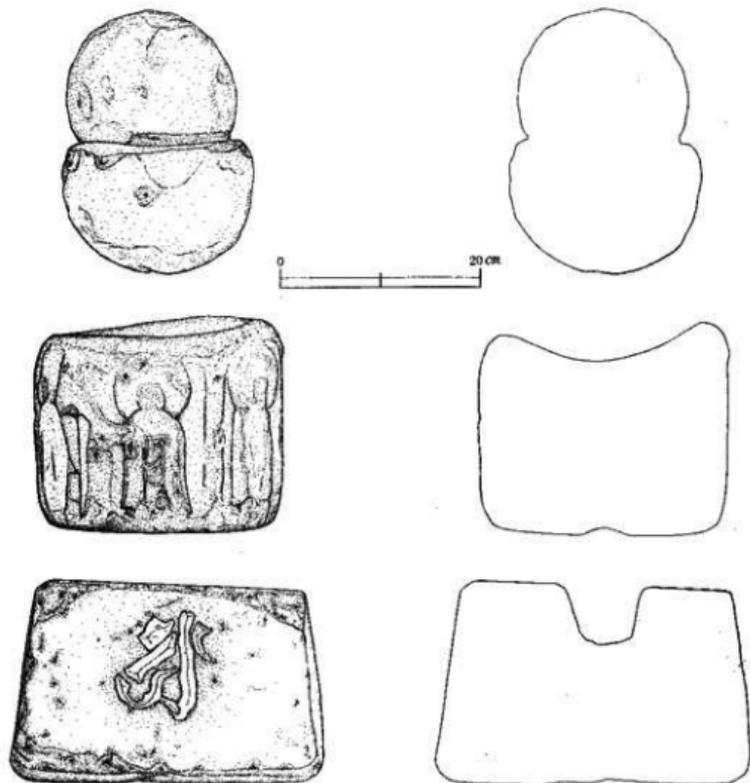


第9図 金山遺跡出土遺物(1/4)

しての二次利用が考えられる。

石塔

五輪塔の地輪・空風輪とその間に六地藏を組み合わせたものである。安山岩質の石材でつくられるが、地輪・空風輪と六地藏では若干材質が異なるようである。空風輪は一つづきで、空輪は径約17cm、風輪は径約19cmを測り、大小の塊を合わせたような形態でくびれをもつ。地輪は約30cm×30cm×20cmを測り、上部幅より下部の幅が若干広い、台形の形態を呈しており、四面に梵字が刻まれている。この四方に配された梵字は、^ア𑖀(東方発心門)・^イ𑖀(南方修行門)・^ウ𑖀(西方菩提門)・^エ𑖀(北方涅槃門)と読める。また地輪上部中央には、納骨穴と思われる小穴が穿たれている。六地藏は、直径約25cm高さ約20cmの円柱の六面に刻まれているが、軟質の石材の為か、磨滅・剝落により地蔵の姿が判然としていない。



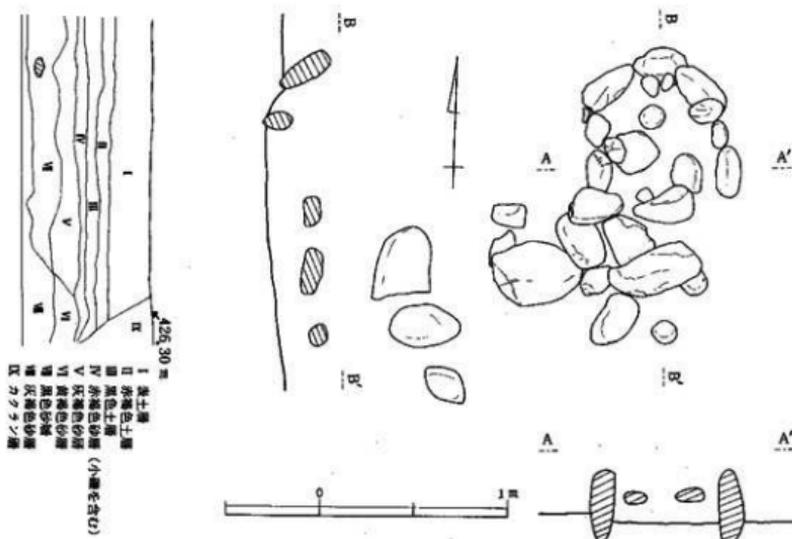
第10図 金山遺跡 石塔

Ⅱ 下木戸遺跡

1 遺構 (第11図)

試掘穴中央部、地表下約1.1mより検出された。規模は、東西約80cm南北約160cmを測り、遺存のよい北半部は、やや偏平な石を立てて配してある。南半部は、石が抜かれ散在していた。平面形は隅円長形で、南半部では掘り方が確認できた。本遺構からは、小さな面積であるにもかかわらず、土器片の良好な出土がみられた。

当初本遺構は住居址のカマドと思われたが、調査の進む中、配石遺構ととらえるに至った。平安期の墓域とも考えられるが、性格等の詳細は不明である。



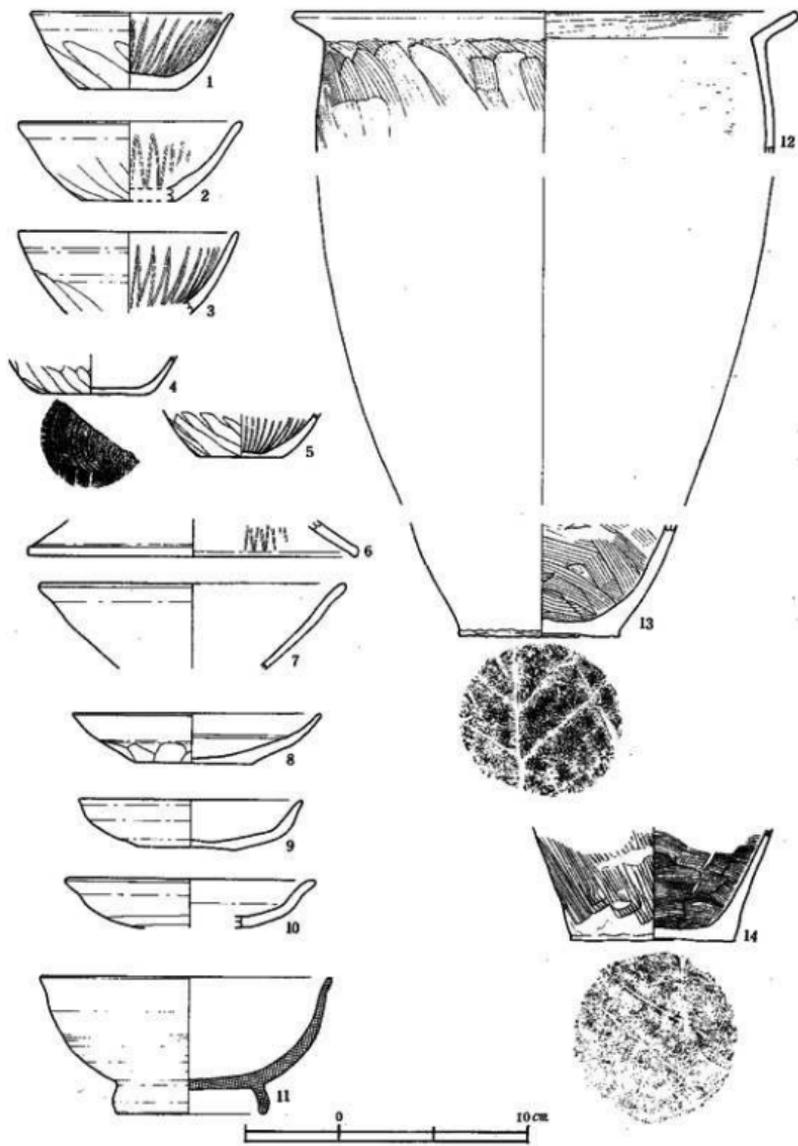
第11図 下木戸遺跡 土層図 ($\frac{1}{60}$) 遺構 ($\frac{1}{30}$)

2 遺物 (第12図)

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	土師器	坏	4.1	10.7	5.3	微砂粒 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半及び底部ヘラ削り 内面 花卉状 暗文 略完形
2	土師器	坏	4.2	11.8	5.0	微砂粒 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半及び底部ヘラ削り 内面 花卉状 暗文 $\frac{1}{5}$ 欠損



第12図 下木戸遺跡 出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
3	土師器	杯	-	11.5	-	微砂粒 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半へら削り 内面 花卉状 暗文 $\frac{5}{6}$ 欠損
4	土師器	杯	-	-	5.5	砂粒 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半へら削り 底部回転糸切後 外周のみへら削り $\frac{3}{4}$ 欠損
5	土師器	杯	-	-	4.4	精製 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半及び底部へら削り 内面 花卉状 暗文(?) $\frac{3}{4}$ 欠損
6	土師器	蓋	-	17.3	-	微粒子 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	外縁部の小破片 内面に暗文?がみられる
7	土師器	杯	-	16.1	-	微粒子 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	焼成良好 密
8	土師器	皿	2.7	13.1	6.2	砂粒を含む	赤褐色	体部下半及び底部へら削り $\frac{1}{6}$ 欠損
9	土師器	皿	2.5	11.7	5.0	砂粒 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半及び底部へら削り 磨滅により器面はザラつく $\frac{1}{2}$ 欠損
10	土師器	皿	2.6	13.1	-	精製 赤褐色 色粒子を含む	赤褐色	体部下半へら削り $\frac{1}{6}$ 欠損
11	灰粉陶器	杯	7.3	15.3	7.8		灰白色	ロクロ水挽 軸はつけかけ
12	土師器	甕	-	26.5	-	砂粒 金雲母を含む	暗褐色	口縁部 横ナデ 外面 縦ハケ整形 内面 横ハケ整形 口縁部破片
13	土師器	甕	-	-	8.7	砂粒 金雲母を含む	暗褐色	外面 縦ハケ整形 内面 斜メハケ 整形 底部 木葉痕 胴部上半欠損
14	土師器	甕	-	-	8.5	石英・長石 砂粒を含む	暗褐色	外面 縦ハケ整形 内面 横細かい ハケ整形 底部木葉痕 胴部上半欠損

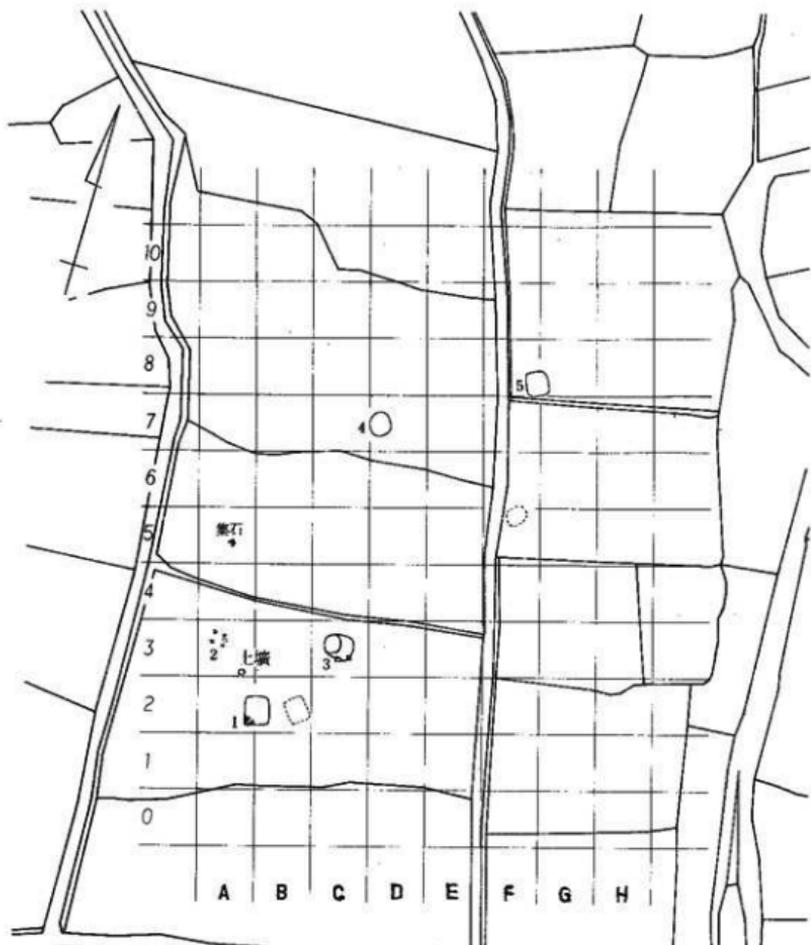
Ⅱ 中 道 遺 跡 (第13図)

調査の結果、竪穴式住居址5軒・石組遺構1基・土壇1基が発見された。以下、住居址から遺構と遺物についてみていこう。

〈1号住居址〉 (第14・15図)

〔遺 構〕

調査区西南に位置する。昭和59年度に行った試掘調査により、床面が検出された。水田床土下の暗褐色土中に落ち込みを発見し、発掘する。竪穴内埋没土も暗褐色土であり、地山との境が判然としないため、床面を検出しそれを掘り進め壁の立ち上りを搜した。規模は東西約4.5m、南北約5.3mで、平面形は略長方形を呈する。壁高は25cm前後を測る。床面は暗褐色土で平坦である。柱穴・周溝はない。カマドは、南西コーナーに石組で構築される。壁に沿って床面上に焼土が多くみられた。火災にでも遭ったのであろうか。



第13図 中道遺跡 全体測量図 (1:1000)

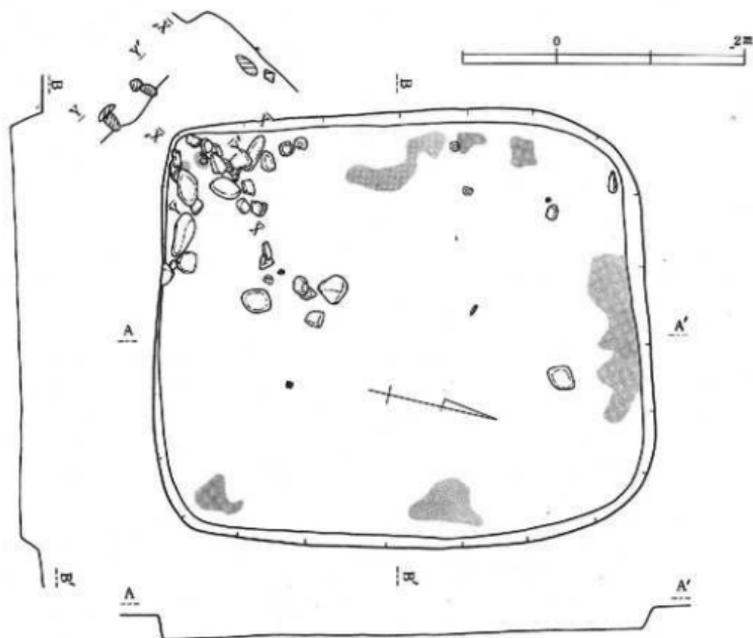
〔遺物〕

遺物の出土は少ない。カマド近く、竪穴内西側に皿類の出土が目立った。特殊なものとして、埋没土中より、鉄鏃が2点、縄文時代草期後半の押型文土器が出土している。

出土遺物一覧

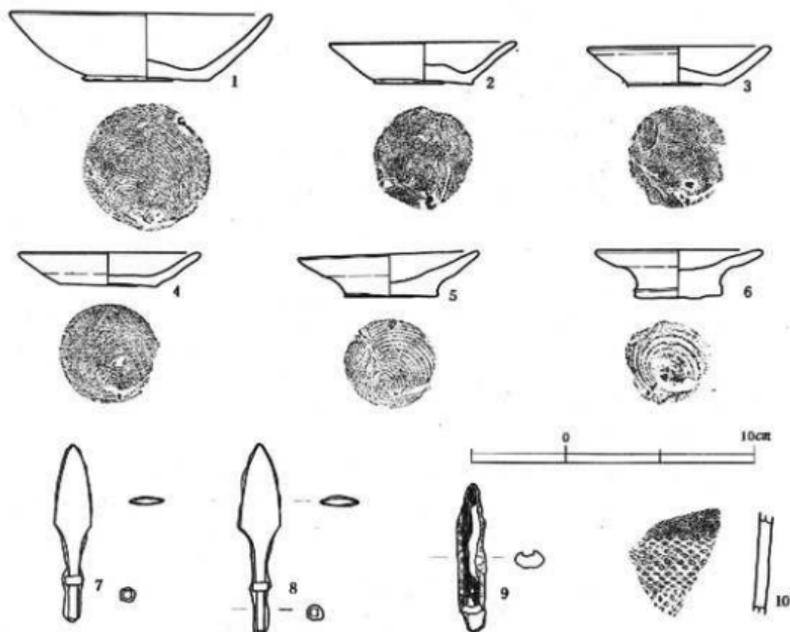
(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	土師	杯	3.6	13.8	6.6	砂粒 赤色粒子を含む	灰褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り 口縁部若干欠損
2	土師	皿	2.2	9.8	5.2	砂粒を含む ザラつく	赤褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り 口縁部若干欠損



第14図 1号住居址 (1/60)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調	整形・特徴・その他	
			器高	口径	底径				
3	土師	皿	2.1	9.5	5.1	砂粒を含む ザラつく	赤褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り	略完形
4	土師	皿	1.8	9.5	5.1	砂粒を含む	燈褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り	1/3欠損
5	土師	皿	2.2	9.5	5.0	金雲母を多量 に含む	燈褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り	完形
6	土師	皿	2.6	8.7	4.6	砂粒・金雲母 を多量に含む	黄褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り	1/3欠損
7	鉄器	鎌							
8	鉄器	鎌							
9	鉄器							木質が付着しているが、詳細は不明	
10	縄文							楕円形 押型文 縄文時代早期後半	

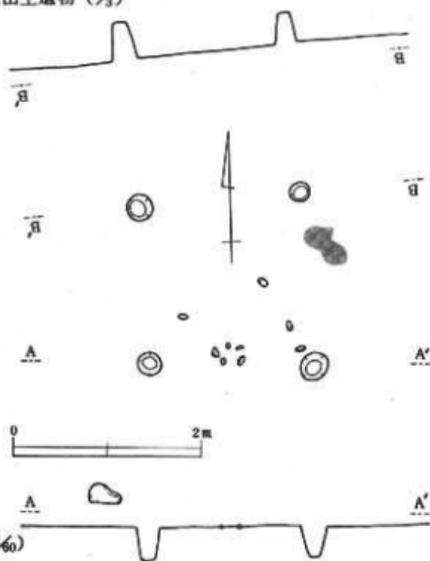


第15図 1号住居址出土遺物 (1/5)

〈2号住居址〉 (第16・17図)

〔遺構〕

調査区西部に位置する。水田床土直下に床面を検出。竪穴式住居址であったと思われるが、削平により壁はない。平地式住居址か？ 4本の柱穴を発見。直径は約20cm～30cm、床面からの深さは35cm前後を測る。各柱穴間の距離は一間程(約1.8m～2m)である。踏みしめられた床面は、柱穴よ

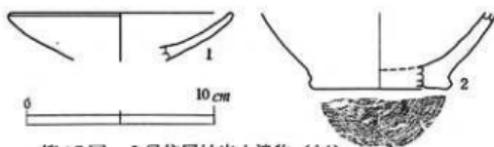


第16図

2号住居址 (1/6)

り外側 20cm 前後から内側にかけてみられた。カマドと確実に判る遺構はないが、床面東端に焼土があった。

〔遺物〕



第 17 図 2 号住居址出土遺物 (1/6)

竪穴が遺存しておらず、覆土中よりの土器の出土は極僅かであった。

出土遺物一覧

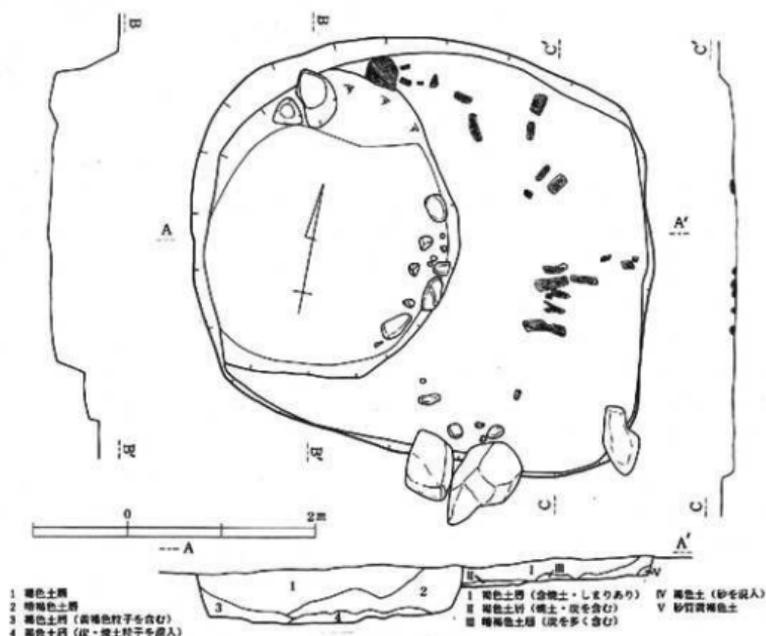
(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量		胎 土	色 調	整形・特徴・その他	
			器高・口径・底径					
1	土師質	皿	-	11.8	-	金雲母を多量に含む	暗褐色	口縁部破片
2	土師質	壺	-	-	7.0		黄赤褐色	底部 回転糸切り 底部破片

〈 3 号住居址 〉 (第 18・19 図)

〔遺 構〕

調査区中央南西よりに位置する。暗褐色土中に褐色土の落ち込みを免見し、発掘する。規模



第 18 図 3 号住居址 (1/60)

は、東西・南北約4.5mを測る。平面形は隅円方形を呈すると思われるが、西半分は大きな土壌によって切られており定かではない。削平により、壁高は20cm前後と浅い。床面は平坦で、住居址の建築材と思われる炭化物が散在していた。柱穴・周溝はなく、カマドも残存部にはない。土壌は約2.8×3.2mで、平面形は不整楕円形を呈し、確認面からの深さは45cm前後を測る。

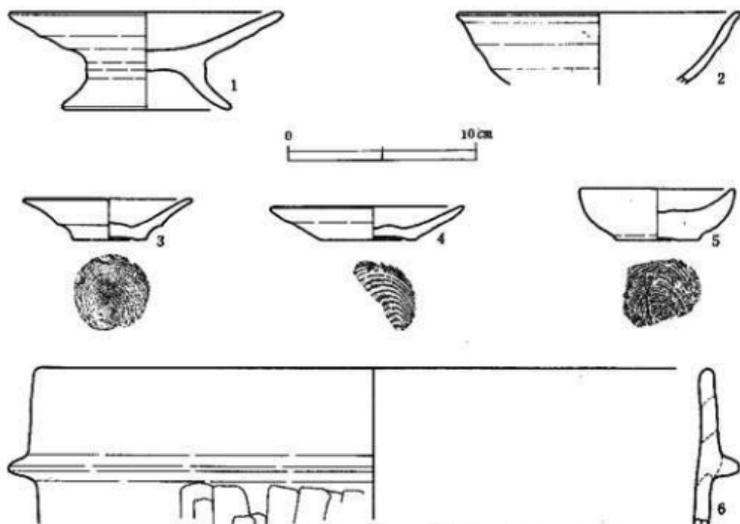
〔遺物〕

住居址内北側から出土した。土壌からの出土はない。

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調	整形・特徴・その他	
			器高	口径	底径				
1	土師	杯	5.2	14.3	8.8	金雲母多量に含む	茶褐色	高台付	ロクロ成形 1/3欠損
2	土師	杯	-	14.9	-	金雲母多量に含む	暗褐色	内・外面 横ナデ	ロクロ成形 口縁部破片 口縁部破片
3	土師	皿	2.2	8.8	3.9	金雲母多量に含む	赤褐色	ロクロ成形	底部 回転糸切り 1/3欠損
4	土師	皿	1.8	10.2	5.0	精製	淡褐色	ロクロ成形	底部 回転糸切り 2/3欠損
5	土師	皿	2.8	8.1	4.3	微砂粒を含む	茶褐色	底部 回転糸切り	1/3欠損
6	土師	羽釜	-	35.4	-	砂粒を含む	赤褐色	踵より下半節削り	口縁部 横ナデ 口縁部破片



第19図 3号住居址出土遺物(1/3)

〈4号住居址〉（第20・21図）

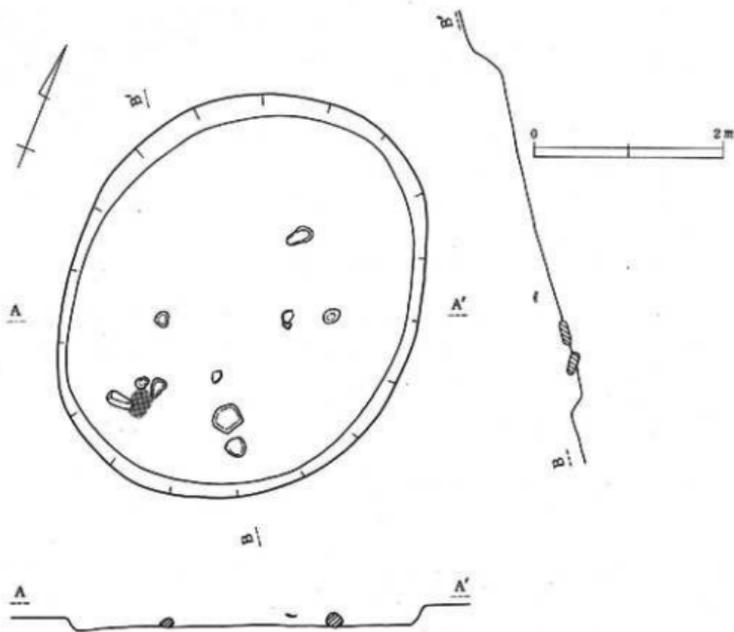
〔遺構〕

調査区北半部に位置する。暗褐色土中から土器片が出土し、掘り下げを行ったところ床面を発見した。さらに、床面を追い壁の立ち上がりを捜した。規模は東西約3.7m、南北約4.5mを測り、楕円形の平面形を呈する。床面は平坦。壁は外傾し、高さ20cm前後を測る。柱穴はない。炉はないが、床面南西部に約30cm×20cmの大きさで焼土がみられた。

〔遺物〕

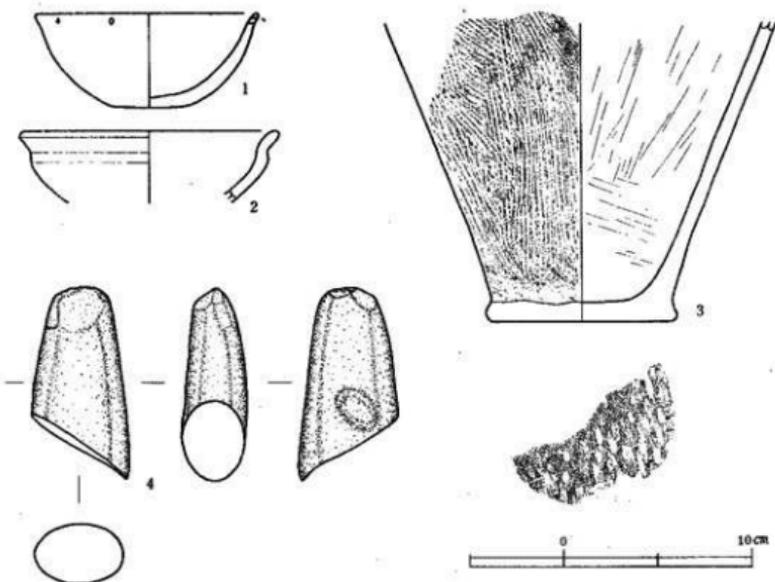
出土遺物は少ない。住居址中央部より埴形土器が、南西部より深鉢形土器片などが出土している。

1. 埴形土器。口縁部を若干欠損する。色調は茶褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内外面ともに磨きかけられる。口縁部は外反し、小孔が二つあく。
2. 埴形土器。口縁部破片。色調は暗褐色を呈する。胎土には砂粒を含む。内外面ともに磨きかけられる。口縁部はくびれをもって外反する。



第20図 4号住居址(1/60)

3. 深鉢形土器。胴部上半を欠損する。色調は外面淡赤褐色、内面暗褐色を呈する。胎上には砂粒・赤褐色粒子を含む。外面は縦方向の条痕文が施され、内面は棒状工具による粗い磨きがかけられる。底部は網代痕。
4. 磨製石斧。乳棒状磨斧の破片。石材は緑色片岩。



第 21 図 4号住居址出土遺物(ㄨ)

〈 5号住居址 〉 (第 22・23 図)

〔 遺 構 〕

調査区北東部に位置する。排土作業中に床面を発見し掘り進む。削平により浅い堅穴となっており、壁高は10cm前後を測る。床面は平坦。柱穴・周溝はない。規模は長辺約4m、短辺約3.5mを測り、隅円方形の平面形を呈する。カマドはない。

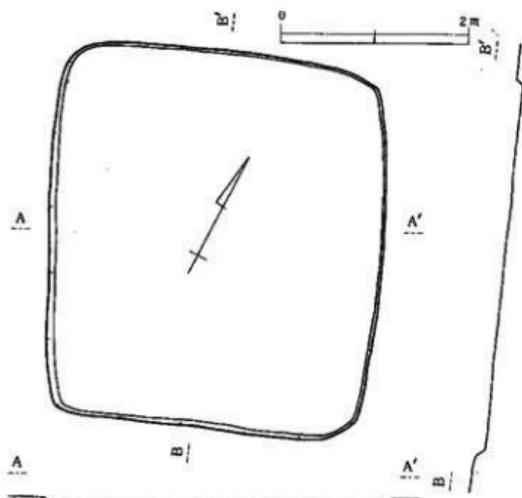
〔 遺 物 〕

遺物の出土は少ない。2点のみ図化できた。

出土遺物一覧

(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調	整形・特徴・その他	
			器高	口径	底径				
1	土 師	皿	2.5	9.6	4.9	金雲母・砂粒を含む	赤褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り	2/3欠損
2	灰 陶	軸 器 環	-	11.8	-	精製		ロクロ水換	口縁部破片



第22図 5号住居址 (1/60)

〈土 墳〉 (第24図)

調査区南西部に位置する。暗褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。平面形は不整形円形を呈し、直径1.1m前後を測る。底の深さは、確認面から約50cmを測る。中央部に双頭大の石があった。出土遺物はない。構築時期等詳細は不明。

〈集石遺構〉 (第25・26図)

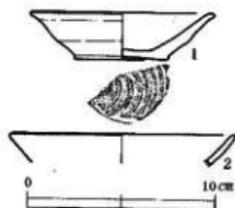
〔遺 構〕

調査区中央部西端に位置する。暗褐色土中に拳大~頭大の石を検出する。これらの石にともない、土器片が集中して出土したので遺構としたが、その性格等は明らかではない。

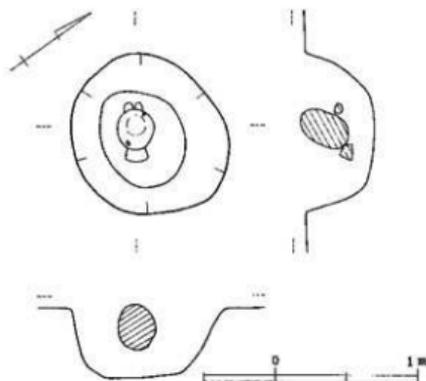
〔遺 物〕

出土土器片は、縄文時代中期末葉から後期前葉にかけてのものであるが、何点かとりあげ図化し、文様などを主体にみてみよう。

1. 胴部にくびれをもつ深鉢形土器の破片。口縁部は無文帯。胴部には、比較的太く深い沈線



第23図
5号住居址出土遺物 (1/5)

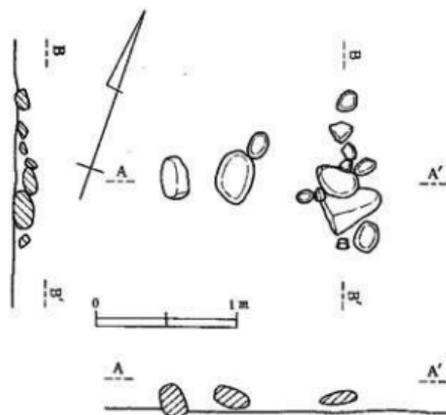


第24図 土墳 (1/40)

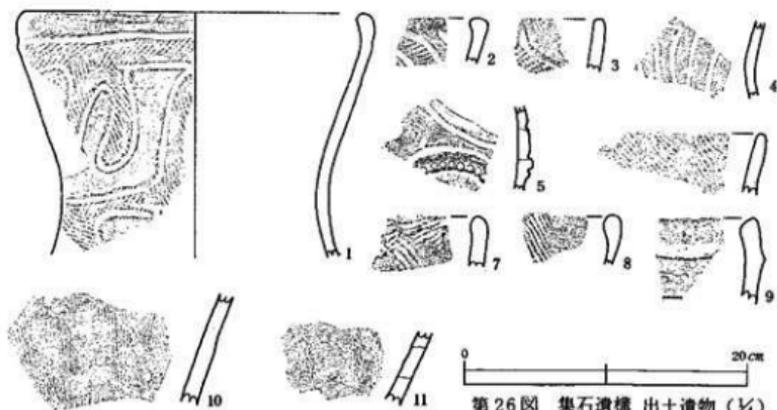
により区画文が施され、その間に
充填縄文が施されている。

2. 口縁部破片。1と同様の手法。
3. 口縁部破片。1と同様の手法。
4. 胴部破片。1と同様の手法。
5. 胴部破片。磨消縄文の手法により、
太い沈線による区画文が施され、列
点状刺突文を内側にともなう微隆帯
による区画文が施されている。
6. 口縁部破片。無文と縄文が交互に
並んでいる。
7. 口縁部破片。6と同様であろう。
8. 口縁部破片。6と同様であろう。
9. 口縁部破片。口縁部は無文帯で、以下に断面三角形状の微隆帯が平行し、その微隆帯間
には列点状刺突文が施されている。
10. 胴部破片。縦位に細い条線が施文される。粗製の深鉢の破片であろう。
11. 胴部破片。色調は茶褐色を呈し、胎土には金雲母を多量に含む。S字結節による縦の縄文
が特徴的である。本片は、中期初頭の五領ヶ台式に位置づけられる。参考資料として掲載し
た。

以上、簡単に土器片をみてきたが、果たしてここでは遺構とした集石にともなうものか、単
なる流れこみによるものか疑問が残る。



第25図 集石遺構 (1/40)



第26図 集石遺構 出土遺物 (1/4)

〈遺構外出土遺物〉

本遺跡では、遺構外からも遺物の出土があり、特に調査区域西側の水田下の暗褐色土中より縄文時代晩期の土器片が多数出土した。ここでは、まず、縄文時代の土器片について文様を中心として分類を行い、時間的経過をみていこう。

第1群 (第27図1)

早期後半に位置づけられるもの。胎土には金雲母を含む。楕円形押型文が施される。

第2群 (第27図2・3)

中期初頭に位置づけられるもの。胎土には金雲母を多く含む。縄文を地文とし、2は隆線のまわりに刺突が施される。3は沈線による三又状文がみられる。

第3群 (第27図4～6)

中期後半に位置づけられるもの。4・5は籾などによる強い平行沈線の地文に、隆線による懸垂文が施される。6は粘土粒による蛇行懸垂文が施される。

第4群 (第27図・第28図7～28)

中期末葉から後期初頭に位置づけられるもの。

1類 (7～9)

断面三角形の微隆帯により、縄文と無文帯をわけたもの。

2類 (10・12)

無文帯と縄文が交互にあるもの。

3類 (11・13)

縄文のみのもの。

4類 (14)

縦位に細い条線が施されるもの。

5類 (15・16)

断面三角形の微隆帯が口縁部に二条めぐり、その間隙に列点状刺突文が施されるもの。

6類 (17～28)

比較的太い沈線により曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が施されているもの。

第5群 (第28図 29～35)

後期前葉に位置づけられるもの。

1類 (29)

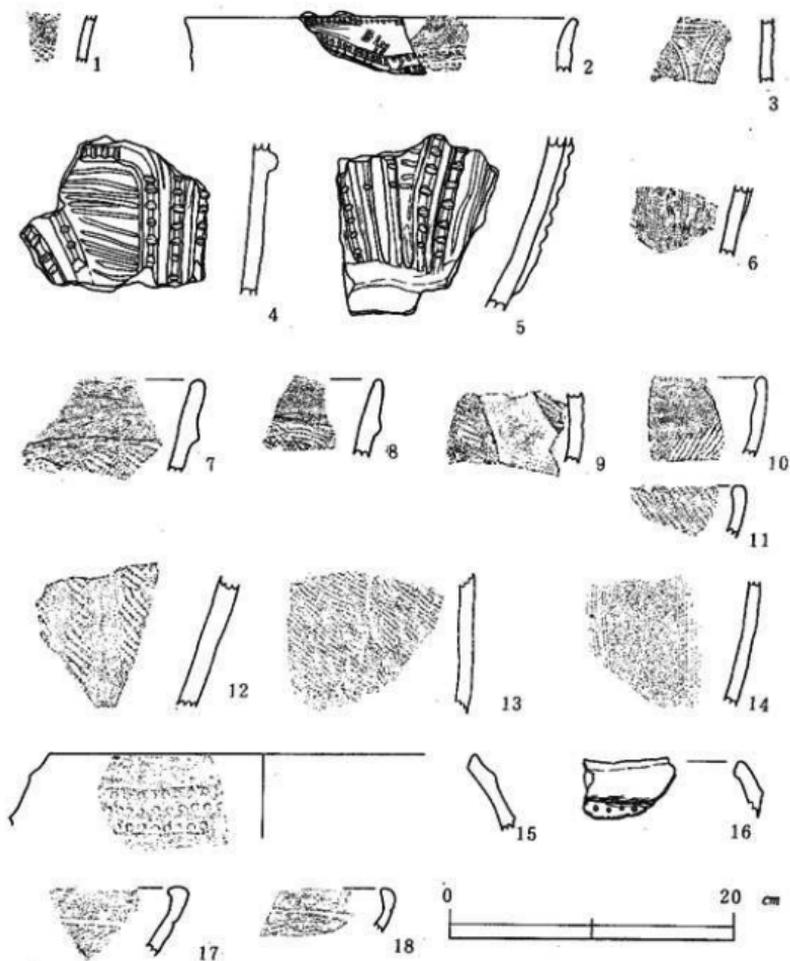
沈線とその内側に施される充填縄文と刺突により、口唇部文様帯を形成している。

2類 (30～32)

縄文を地文とし、沈線により渦巻文等を施文するもの。

3類 (33・34)

刺突と沈線による文様を施すもの。



第27図 遺構外出土遺物 (1/4)

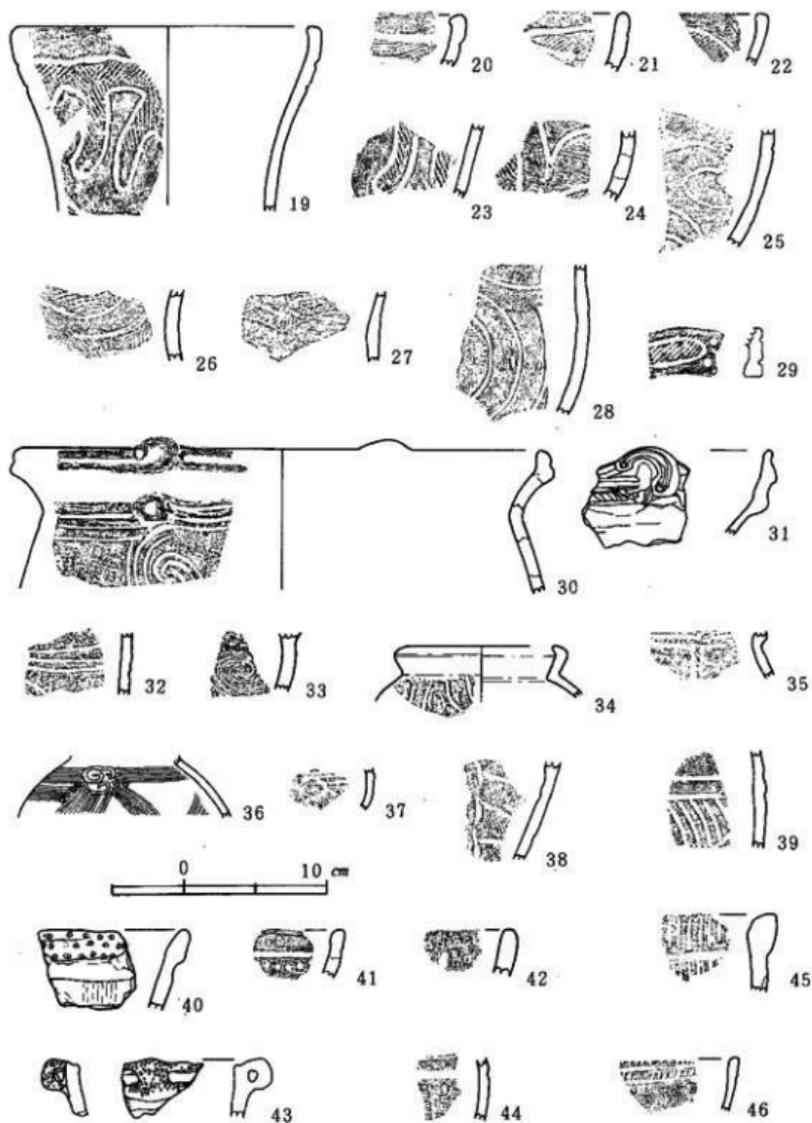
4類 (35)

刻目のある微隆帯と、「8」の字貼付文が施されているもの。

第6群 (第28図 36~38)

後期中葉に位置づけられるもの。

1類 (36・37)



第28图 遺構外出土遺物 (1/4)

沈線により逆「の」の字と、三角地帯が作りだされるもの。

2類 (38)

孤線によって縄文と無文帯がわけられ、括弧状の沈線文が縦に並ぶもの。

第7群 (第28図 39～46)

後期に位置づけられると思われるが、明らかでないので参考資料として一括しておく。

39・45は沈線による文様が施される。40～42は、竹管による円形刺突文を特徴とする。43は把手と口唇部に刺突が施される。44は棒状工具の角をつかい、縦方向に施文している。46は口唇部に沈線がはしり、半截竹管による刻目が2段に連続している。

第8群 (第29～37図)

晩期後半～末葉に位置づけられるもの。

遺構外出土土器の内大半を占める。いずれも破片であるが、浅鉢・深鉢の類が多いと思われる。文様を中心に何類かに分けられる。

1類 浮線網状文を指標とする土器を一括する。(第29～31図 1～45)

浅鉢が大半を占める。比較的薄手で、焼成良好。色調は黒褐色系を呈するものが多く、茶褐色・黄褐色が次ぐ。器面は丁寧に磨かれているが、光沢をもつものは少ない。丹彩された痕跡をもつ例(37・38・41・42)もみられる。

口縁の形態によりおおむね、a種 口縁が緩やかに内湾しつつ、あるいは直線的に開く形態のもの(10～13・21～27・32・36・40～42・44・45)、b種 口縁が内湾・屈曲する形態のもの(4～8・14～17・19)、c種 口縁が外反し肩に段または稜を有する形態のもの(1～3・9・28～31・38・39)に三分される。これらのうちには、内外面に三角形の挟り込みを伴う突起を連ねた口縁の例(2)、小突起のつけられる例(3・6・8・10・12・15・16)、波状の口縁を呈する例(13・38)がみられる。

文様についてみれば、工字状文の例(1)、眼鏡状浮文・浮線槽円文が連続する例(3～12・14)があり、ほかは所謂変形工字状・浮線網状文となっており、その文様の種類も多くなっている。但し、44は沈線による文様であり他と趣を異にしている。

2類 沈線・隆線帯のみのもの、無文のものを一括する。(第32～34図 1～66)

すべて口縁部破片である。色調は黒褐色・褐色・黄褐色に分けられる。丹彩される例(59・66)がある。

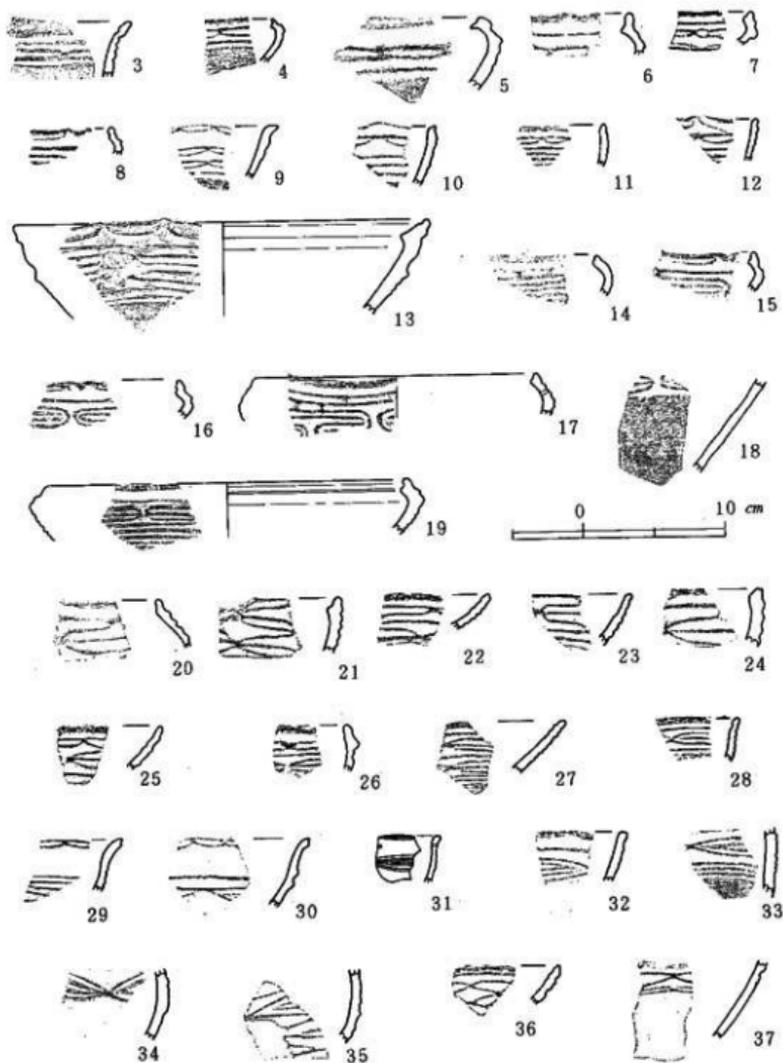
口縁の傾斜により主観的に、深鉢・鉢・浅鉢などに便宜的に分けた。深鉢は、胴部に条痕文が施される可能性があるが、不明なため本類とした。

深鉢は、a種 口縁が内傾する形態のもの(1～4)、

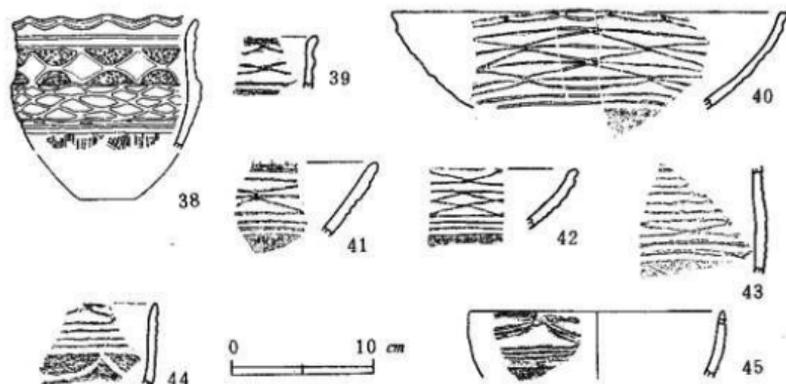
b種 口縁に1条～4条の沈線・隆線帯がめぐるもの(10



第29図 遺構外出土遺物(1/4)

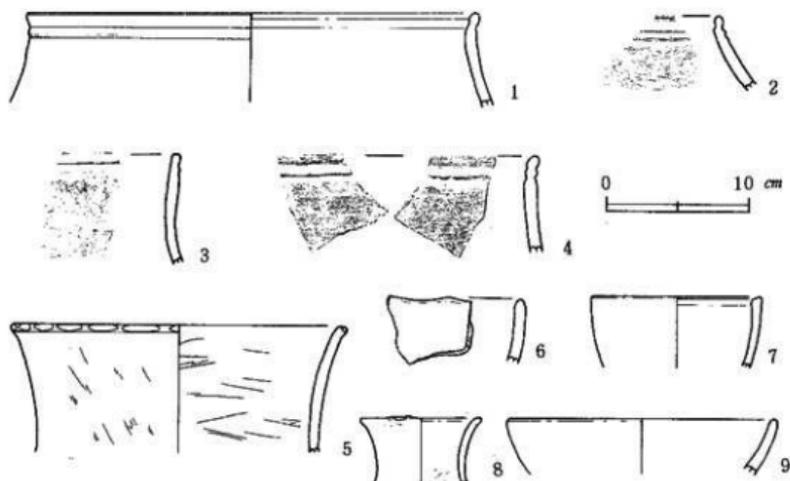


第30图 遺構外出土遺物 (1/4)

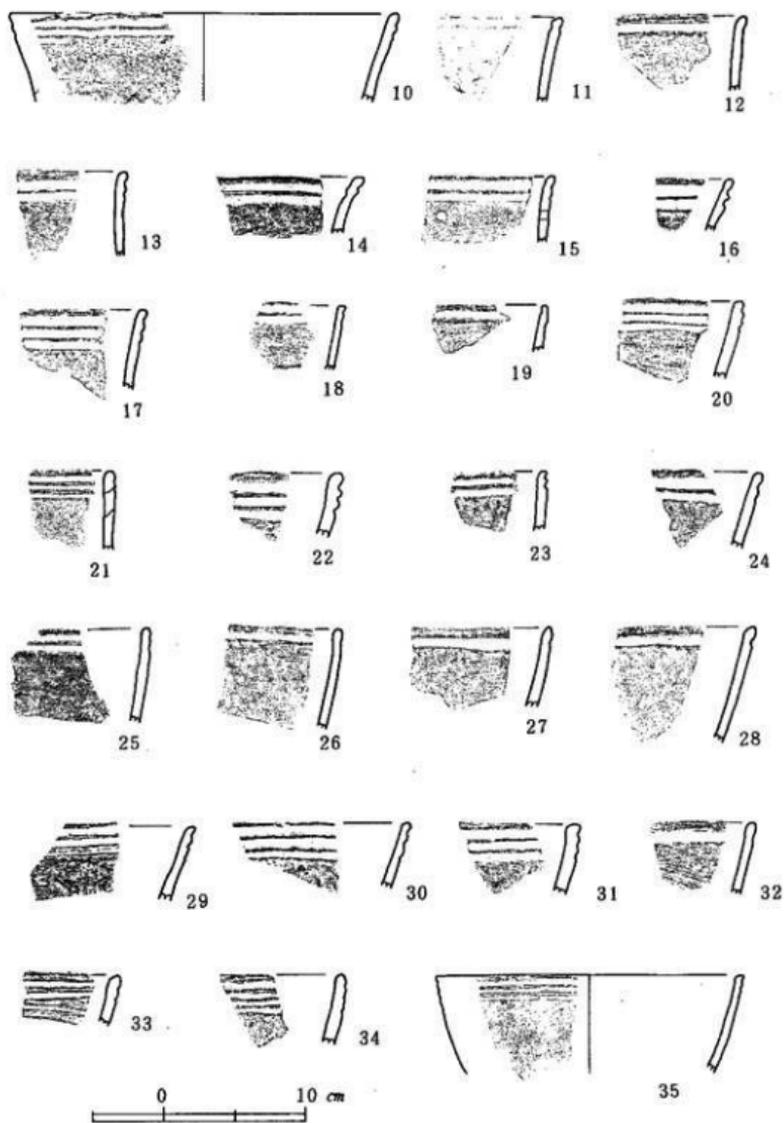


第31図 遺構外出土遺物 (1/4)

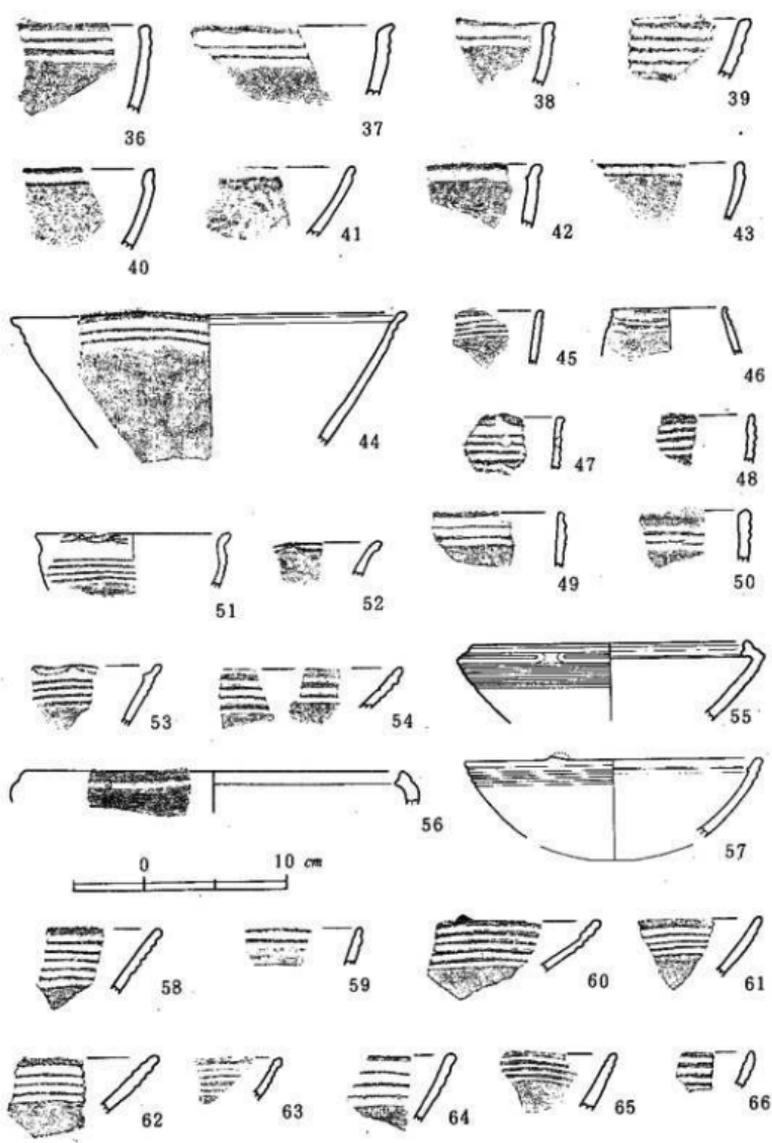
～39)に大別できる。鉢は、口縁に1条～3条の沈線・隆線帯がめぐるもの(40～44)。壺は、口径の比較的小さなものを一括した(45～50)。浅鉢は、口縁の形態により、a種口縁が緩やかに内湾しつづつ、あるいは直線的に開く形態のもの(53・54・57～66)。b種口縁が内湾・屈曲する形態のもの(55・56)。c種口縁が外反し、肩に段を有する形態のもの(51・52)に分けらる。無文のものは、口縁に削り込みが連続する深鉢(5)、波状口



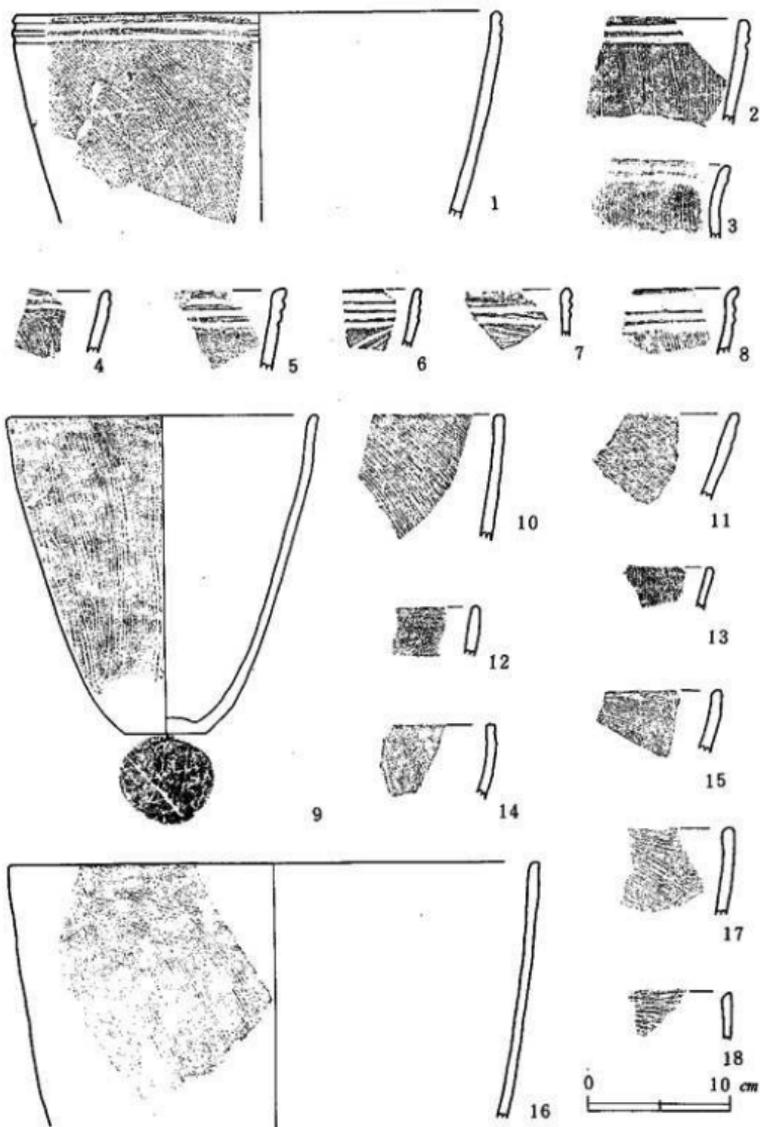
第32図 遺構外出土遺物 (1/4)



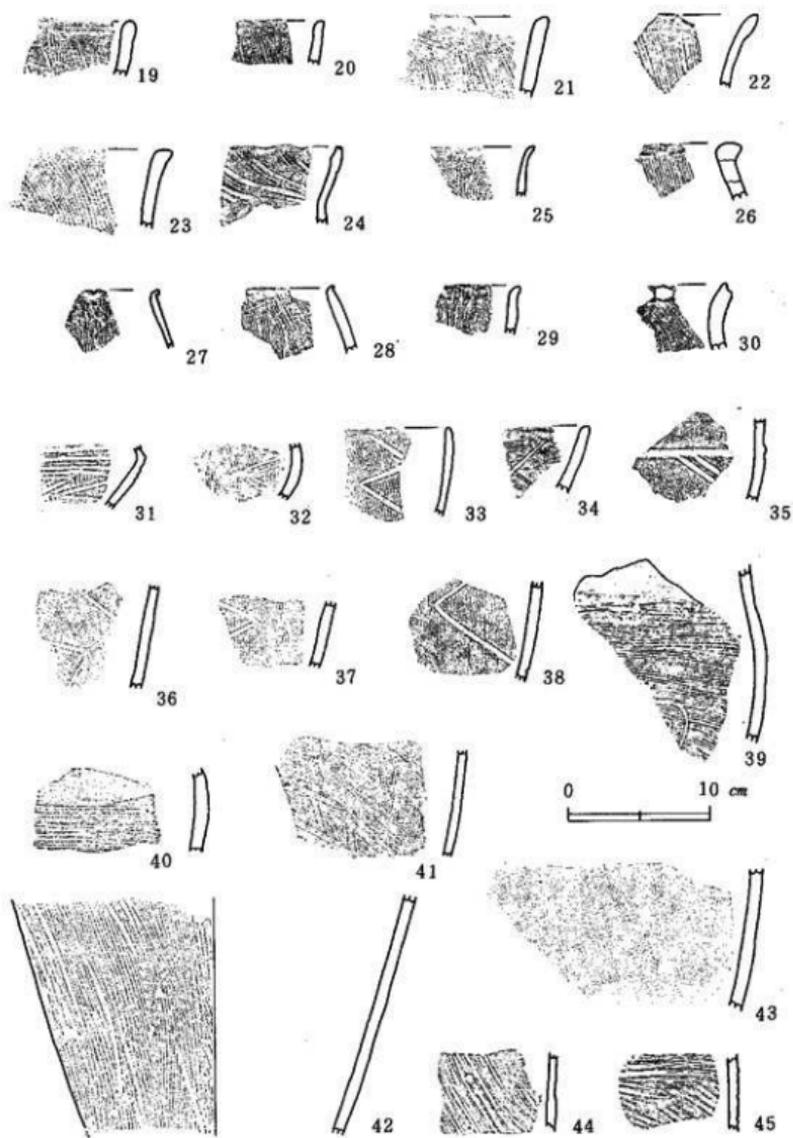
第33图 遺構外出土遺物 (1/4)



第34图 遺構外出土遺物 (1/4)



第35圖 遺構外出土遺物 (1/4)



第36圖 遺構外出土遺物 (1/4)

緑の鉢(6)、平緑の鉢(7)、突起を有する甕(8)、平緑の浅鉢(9)がみられる。

以上のうち小突起を有する例(36~39・45・47・50~53・57・60)がいくつかある。

3類 条痕文土器を一括する。(第35・36図 1~45)

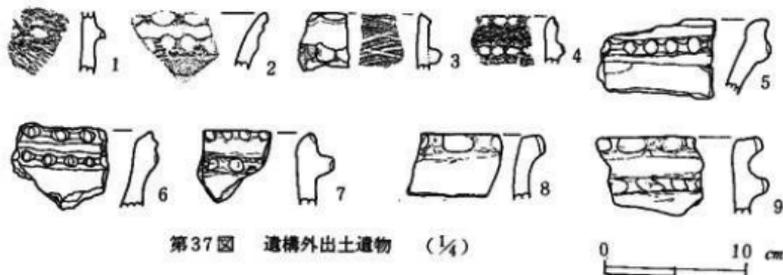
深鉢が主体を占める。器面の整形によるものか、胎土には石英・長石等の砂粒が目立つ。色調は暗褐色系が多く、茶褐色・黄褐色が次ぐ。条痕の方向は、縦位・斜位・横位などがみられ、その形態も、口縁に沈線がめぐるもの。口縁から直に条痕がつけられるもの。口縁に無文部位があり以下に条痕を施すもの。胴部に稲妻文乃至蛇行文を施すものなど変化に富んでいる。なお、11は燃糸文によるものであり、条痕文を意識した施文であろうか。

口縁の形態をみると、a種 緩やかに内湾しつつ、または直線的に伸びているもの(1・2・4~7・9~21・33・34)。b種 外反するもの(3・8・22~25・29・30)。内湾する口縁で口縁端が外折するもの(26~28)に大略分けられる。

4類 凸帯文土器を一括する。(第37図 1~9)

口縁部破片が主体を占める。各々の色調は、黒褐色系(1・2)、茶褐色系(3・6)、黄褐色系(4・5・7)、褐色(8)、灰褐色系(9)に分かれる。8・9は他に比して器面がザラつき、胎土に石英・長石等の砂粒を含むのがよくわかる。

それらには、指頭圧痕による凸帯を2条ないしは1条めぐらす形態のもの(1・2・4~7)。大きな刻目の施される凸帯がめぐる形態のもの(8・9)。口唇部に刻目、口縁下には指でつまんで付けたような凸帯がめぐる形態のもの(3)がある。また、これらは口縁部破片であり詳細は判らないが、1の如く頸部以下に条痕文が施される可能性もある土器であろう。



第37図 遺構外出土遺物 (1/4)

石製品・土製品 (第38図)

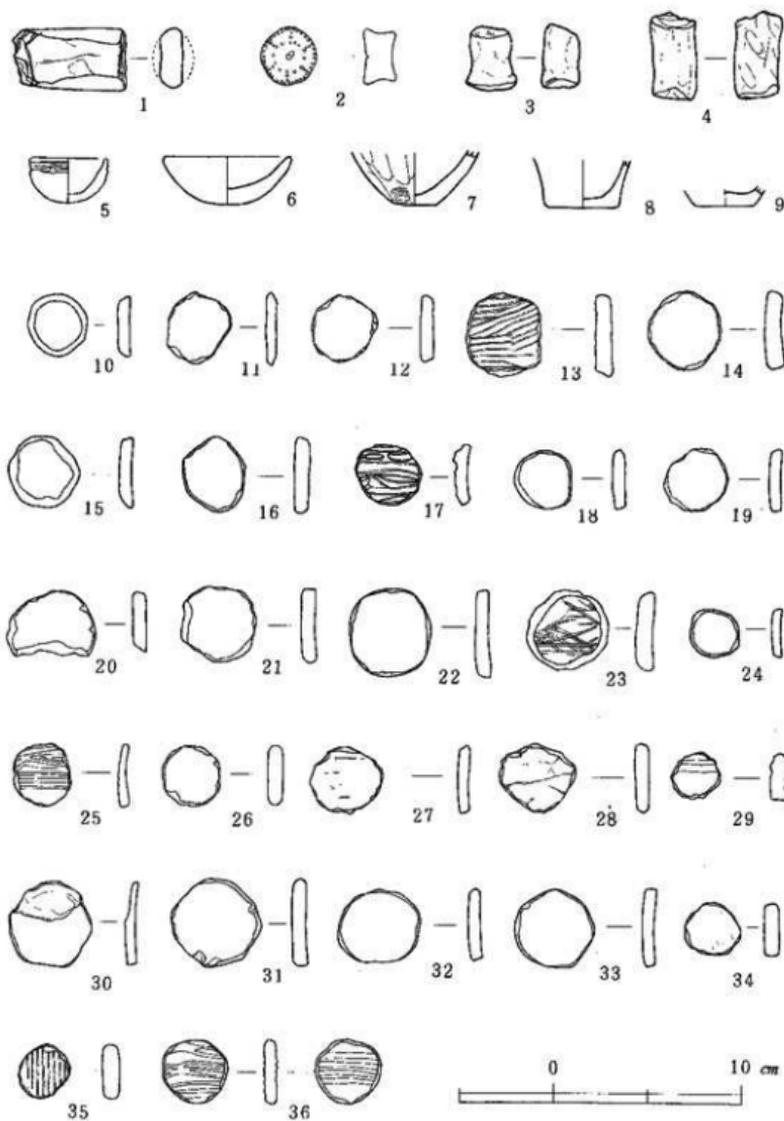
石製品(1)

石剣・石棒のたぐいと思われるが、剝落が著しい。粘板岩製。

土製耳飾(2)

断面白形、色調は白褐色を呈する。片面(表面)に刺突により文様が施される。

土偶(3・4)



第38圖 遺構外出土遺物 (1/3)

二個体とも足の部分。色調は、褐色（3）、茶褐色（4）を呈する。胎土には砂粒を含み指頭によるナデ痕がみられる。

小形土器（5～9）

5は赤褐色を呈し、浮線文が施されるもので、甗の可能性もある。6・8は黒褐色を呈し若干の光沢がある。7は篋削り痕が残る。9は白褐色を呈する。

土製円板（10～36）

形態は、円形・隅円方形状を呈し、色調は黒褐色と黄褐色系に大別できる。いずれも縄文時代晩期の土器を利用したものであろう。

石器（第39～42図）

石鏃・石錐（第39図 1～22）

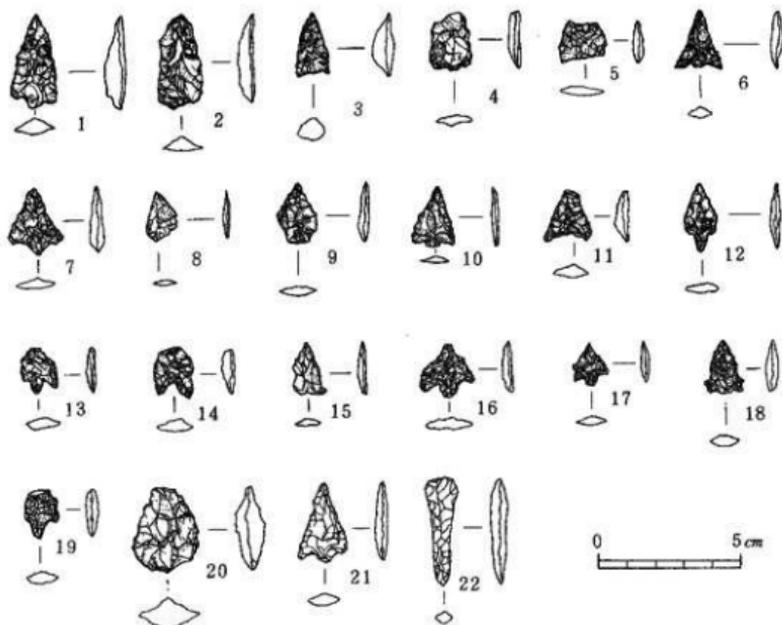
石器一覧

番号	特徴・その他	石質	番号	特徴・その他	石質
1	基部欠損	黒曜石	12	脚部欠損	黒曜石
2	半製品	黒曜石	13	頭部・脚部欠損	黒曜石
3	基部欠損	黒曜石	14		黒曜石
4	頭部・基部欠損	黒曜石	15	基部・脚部欠損	黒曜石
5	頭部・基部欠損	黒曜石	16	脚部欠損	黒曜石
6	基部欠損	黒曜石	17	脚部欠損	黒曜石
7	脚端部欠損	黒曜石	18	基部欠損	黒曜石
8	下部欠損	黒曜石	19	頭部・脚部欠損	黒曜石
9	基部・脚部欠損	黒曜石	20	半製品	黒曜石
10	基部欠損	黒曜石	21	基部・脚部端欠損	頁岩
11	頭端部・基部・脚端部欠損	黒曜石	22	石鏃・完形	硬砂岩

打製石斧・磨製石斧・凹石（第40～42図 1～29）

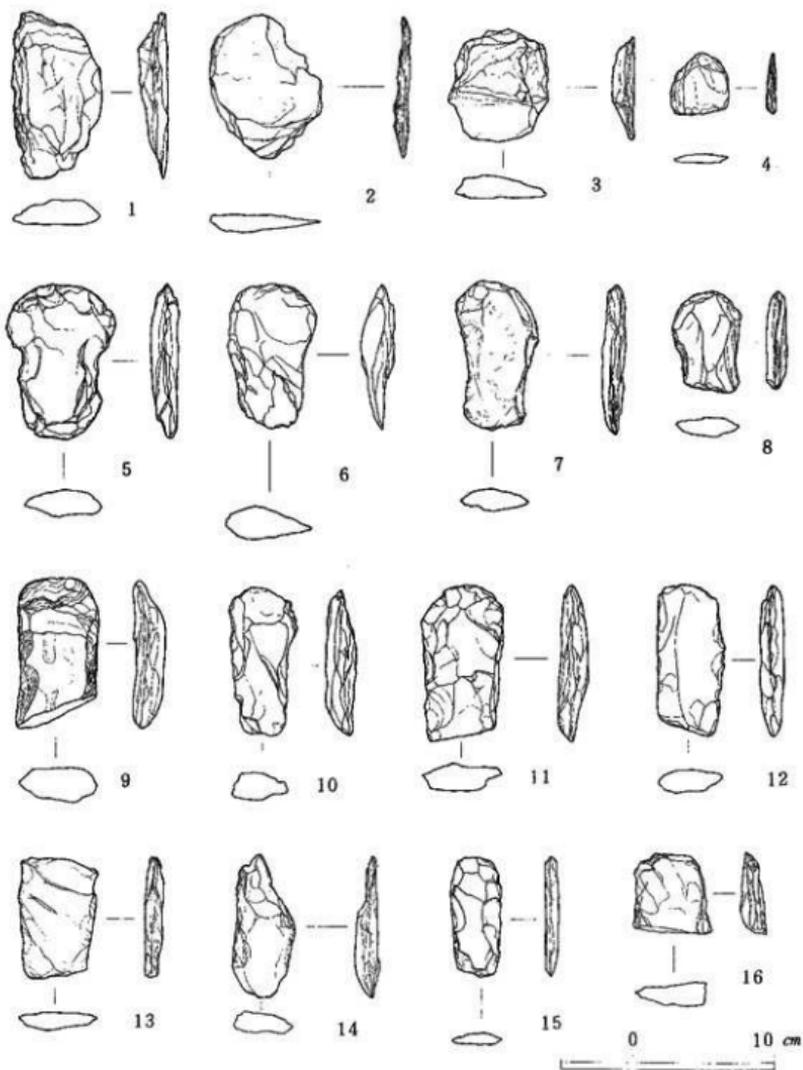
石器一覧

番号	特徴・その他	石質	番号	特徴・その他	石質
1	撥型石斧		2	撥型石斧	粘板岩

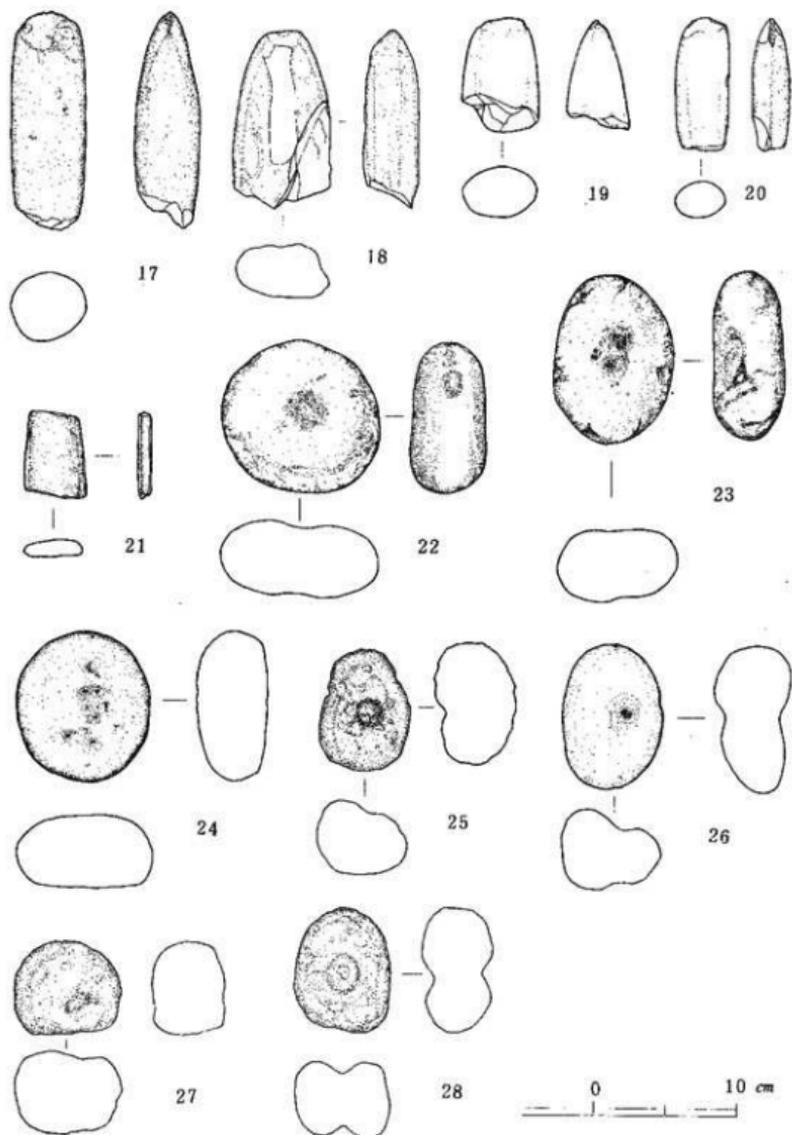


第39図 遺構外出土遺物 (1/2)

番号	特徴・その他	石質	番号	特徴・その他	石質
3	撥型石斧	粘板岩	11	短冊型石斧	凝灰質砂岩
4	撥型石斧	粘板岩	12	短冊型石斧	
5	分銅型石斧		13	短冊型石斧	
6	分銅型石斧		14	短冊型石斧	
7	分銅型石斧		15	短冊型石斧	頁岩
8	分銅型石斧		16	短冊型石斧	
9	短冊型石斧		17	磨製石斧・基部欠損	硬砂岩
10	短冊型石斧		18	磨製石斧・刃部欠損	緑泥片岩

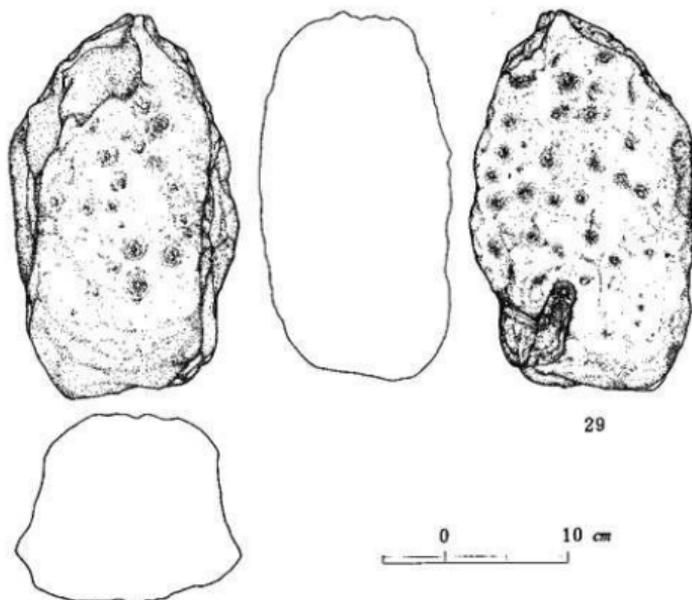


第40図 遺構外出土遺物 (1/4)



第41圖 遺構外出土遺物 (1/4)

番号	特徴・その他	石質	番号	特徴・その他	石質
19	磨製石斧・基部欠損	硬砂岩	25	凹み石 表・側面各1	安山岩
20	磨製石斧・基部欠損	玄武岩	26	凹み石 表・裏・側面各1	凝灰岩
21	不明・擦痕有り	凝灰岩	27	凹み石 表・裏・側面各1	安山岩
22	凹み石・表裏各2	安山岩	28	凹み石 表裏各1	凝灰岩
23	凹み石・表裏各2	花崗岩	29	蜂の巣石 表・裏に多くの凹みあり	安山岩
24	凹み石 明瞭な凹みは見られない	安山岩			

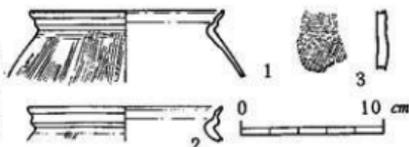


第42図 遺構外出土遺物 (1/4)

以上縄文時代の遺構外遺物についてみてきたが、本遺跡からはほかに、弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の遺物が出土しているので紹介する。

弥生時代・古墳時代遺物 (第43図)

1・2ともにS字状口縁台付甕の口縁部破片。胎土には金雲母がみられる。薄手の土器で、器面には刷毛目が施される。色調は暗赤褐色を呈する。



第43図 遺構外出土遺物 (1/4)

3は、櫛描による簾状文・波状文が施される甕の破片資料。色調は明灰褐色を呈する。

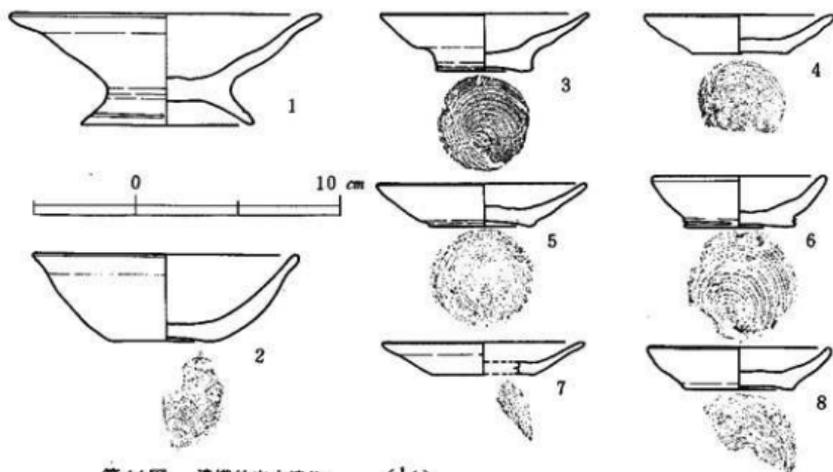
歴史時代遺物 (第44・45図)

平安時代末から中世に至る時期の遺物については一覧表に示した。

出土遺物一覧 (第44図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	土 師	坏	5.5	15.2	8.4	金雲母を多量に含む	茶褐色	高台付 ロクロ成形 1/3欠損
2	土 師	坏	4.3	12.9	5.1	金雲母を多量に含む	茶褐色	ロクロ水挽 底部回転糸切り 2/3欠損
3	土 師	皿	2.8	10.1	4.6	金雲母を多量に含む	茶褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り 完形
4	土 師	皿	1.9	9.2	4.5	砂粒 金雲母を多量に含む	灰褐色	ロクロ成形 底部回転糸切り 1/2欠損
5	土 師	皿	2.1	10.2	5.0	砂粒 金雲母を多量に含む	灰褐色	ロクロ成形 底部回転糸切り 1/3欠損
6	土 師	皿	2.6	8.4	5.4	砂粒 金雲母を多量に含む	茶褐色	ロクロ成形 底部回転糸切り 1/3欠損
7	土 師	皿	1.7	9.8	4.9	砂粒 金雲母を多量に含む	茶褐色	ロクロ成形 底部回転糸切り 2/3欠損

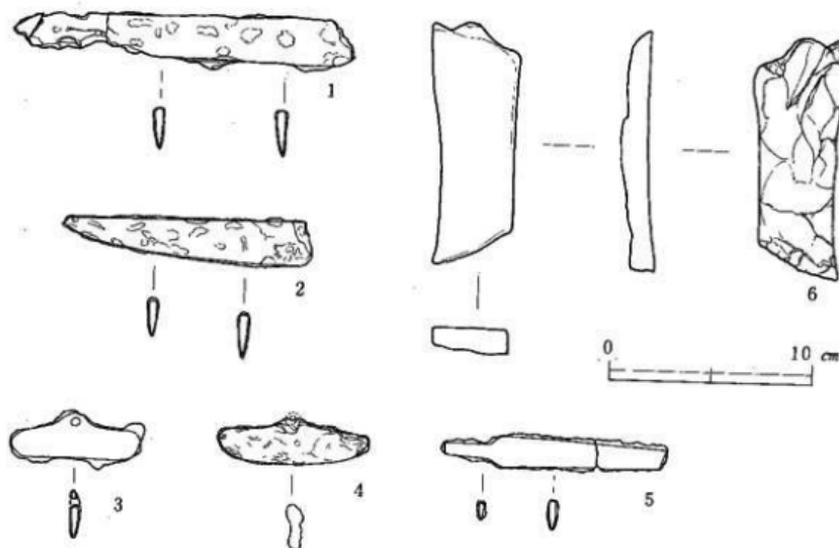


第44図 遺構外出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
8	土 師	皿	2.1	8.8	5.2	金雲母を多量に含む	灰褐色	ロクロ成形 底部 回転糸切り $\frac{2}{3}$ 欠損

鉄器・石器一覽 (第45図)

番号	特徴・その他	材 質	番号	特徴・その他	材 質
1	先端部曲折 刀身部欠損	鉄器刃	4		鉄 器 (火打金)
2	刀身部欠損	鉄器刃	5	先端部欠損	鉄 (刀 子)
3		鉄 器 (火打金)	6	裏面欠損	石 器 (砥 石)



第45図 遺構外出土遺物 (1/3)

〔 総 括 〕

1 発掘調査の成果とまとめ

1 金山遺跡

出土遺物は、直接に遺構にともなうものは少なかったが、土師質の坏・皿・甕、青磁片、内耳鍋、古銭等がみられ、中世を中心とした時期を表わしている。また、人骨と思われる骨片、馬の歯などの出土がみられ、検出された6基の土壌は中世～近世の墓塚と考えるのが妥当であろう。

本遺跡は、集落にともなう墓塚をなしていたと考えられ、水田の畦に置かれていた石塔の内六地蔵についてみれば、各地において古くから六地蔵を墓地の入口にまつという風習が行われており、この六地蔵が存在するという事は（偶然に置かれていた可能性もあるが）、該地が墓地であった可能性が高いと見てよいであろう。

2 下木戸遺跡

今回の調査は、遺跡の確認のみにとどまったが、配石遺構とともに土師器の出土が多く良好な資料が得られた。土師器坏は、形態により9世紀第4四半期に位置づけられる。灰軸陶器は、口径15.3cm・底径7.8cm・器高7.3cmを測り、外反する口縁部の形態は丸石2号窯式に類似するが、高台が原2号窯式のように弧状を呈し、虎渓山1号窯式のように口縁部から胴部にかけてつけがけにより旋軸される点若干先行するのかもしれないが、おおきく11世紀中葉があてられよう。これらにより該期の遺構=集落址が、本地域に濃厚に分布する可能性が窺えるに至ったのは、今回の調査が意義のあるものであったと言えよう。今後本地域に開発等の事業がかかる場合には、埋蔵文化財の保護が必要であり、慎重に対処すべきであろう。

3 中道遺跡

今回の調査で発見された遺構は、縄文時代晩期の竪穴式住居址1軒（4号住居址）、平安時代末期の竪穴式住居址4軒（1～3・5号住居址）である。他に遺構外出土遺物が多く出土している。特に縄文時代後晩期の土器片が多量に出土しており、該期の住居址が発見されたことと合わせ、開墾・耕作などによる破壊を考慮すれば、集落乃至それにかかわるような遺構が存在した可能性が予測される。また、弥生時代後期の飾描波状文を有する土器片、及び古墳時代前期五領期のS字状口縁台付甕の口縁部破片の出土などは、該地における弥生～古墳時代の文化の進展を考えていく上で貴重な資料となることであろう。

平安時代末期の住居址は、出土遺物から甲斐N期以降に位置づけられ、11世紀後半～12世紀が当てられる。遺構外出土遺物にも土師質の坏・皿類が日立つことから、本地域には遅くとも12世紀ころには集落が形成されていたものと思われる。

このように中道遺跡を中心とした地域には、縄文・弥生・古墳・平安時代～現代に至るまで

の永い歴史が刻まれており、今回の調査でその一端が明らかにされたことは意義深いものであったと言えよう。

Ⅱ 藤井平における弥生文化の波及について

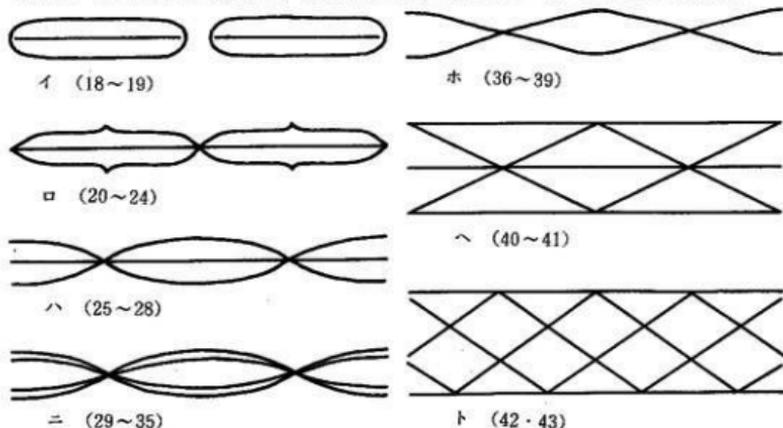
中道遺跡遺構外出土遺物のうち第8群土器とした土器群について、その編年の位置づけを概観し、藤井平における弥生文化の波及をみてみよう。

1 編年の位置づけ

1類は、浮線網状文を指標とする土器群で、三分した口縁部形態についてみると、a種は、長野県水遺跡第1群土器・長野県御社宮司遺跡晩期第Ⅱ群土器などに類似し、b種は、長野県女鳥羽川遺跡出土土器・長野県難山遺跡第8類土器に求められる。c種は、御社宮司遺跡・水遺跡にみられ、長野県トチガ原遺跡出土土器に顕著である。このc種は、僅かの例外を除いて、頸部無文帯を形成するという特徴が認められる。

また、文様モチーフについて眺めてみると、工字状文の施される1は東北地方晩期後葉大洞A式の特徴を表わしている。15~17も同様であろう。2の内外面に三角形の抉り込みを伴う突起を連ねた波状風の口縁は、愛知県佐野遺跡出土の広口壺・長野県満島遺跡出土の壺などに類似したものがあり、東北地方晩期後半大洞C2~A式に目立ったものである。3~12・14にみられる眼鏡状浮文（連続する浮線楕円文）を特徴とする例は、長野県女鳥羽川遺跡出土土器に類例が求められ、中部地方晩期後葉水I式土器に先行するものととらえられている。13の突起間を浮線でつなぐ文様も同じ範疇に入ろうか。

浮線網状文は、概ねイトの7種類に分けられる。これらは中部・関東・東北地方の水I式・大洞A~B式土器に多用される。先学諸氏の研究の成果に因って、類例を拾ってみよう。



第46図 浮線網状文土器文様モチーフ

イは、茨城県殿内遺跡殿内BⅡ式土器にみられる。ロは、群馬県千綱谷遺跡・長野県御社宮司遺跡・長野県水遺跡出土土器などにみられ、関東・中部・北陸・東北南部の広範囲に分布するようである。ハは、長野県離山遺跡・長野県荒神沢遺跡出土土器、ニは、長野県トチガ原遺跡出土土器などにみられ、これらは愛知県二反地遺跡・静岡県山王遺跡など東海地方においても少数ながら出土土器片に認められるようである。ホは、神奈川県杉田遺跡D類土器・千葉県荒海貝塚出土土器などにみられる。特に38についてみると、小波状口縁を呈し、山と山の間は楕円形の凹により口外帯(?)を形成しており、頸部文様帯は浮線によって菱形を描き出しているが、菱形と平行浮線によって作り出される隅凹三角(蒲鋒)地帯には刺突が充填され、胴部上半は浮線網状文、胴部下半は条痕文とその中に稲妻文を垂下させるものである。このような形態を表わす類例を見い出せなかったが、個々にみれば、楕円形凹を有する小波状口縁部は水遺跡第Ⅰ群土器・御社宮司遺跡晩期第Ⅱ群第Ⅰ類土器の浅鉢などに類例がみられ、刺突を除いて平行浮線間に浮線で描き出される菱形文は中部地方を中心に分布している。胴部上半の浮線網状文、胴部下半の稲妻文をとまなう条痕文 - 本遺跡では主に3類に入れた - は、やはり水遺跡・御社宮司遺跡出土土器にみられる。ヘは、新潟県鳥屋遺跡出土土器に、トは、長野県水遺跡・長野県御社宮司遺跡出土土器などにみられ、愛知県檜ノ遺跡出土土器にも倣かに類例がみられる。ホ・ヘ・トは、単一または段を重ねたりする例がある。45は、浮線部に細線が施されるもので、群馬県千綱谷遺跡出土土器に近似した例がある。44は、沈線文であり、1類の中では新しい様相を呈するのであろうか。

以上1類とした土器群についてみてきたが、これらは中部地方水Ⅰ式、東北地方大洞A式期に併行するものであり、その前後の様相を呈するものを若干含むものの、縄文時代晩期後葉後半に位置づけられよう。

2類は、沈線・隆線帯を有するものである。深鉢のうちa種は、金生遺跡2号配石出土の胴部上半肩帯が「く」の字形に屈折する形態の深鉢に器形を求められるであろう。新津健氏は、その土器の祖形を北九州地方夜臼式に求め、中山誠二氏は、北九州地方山ノ寺式～夜臼式単純、近畿地方滋賀里Ⅱ式、東海地方五貫森式に併行するものとした。これらは縄文時代晩期中葉後半に位置づけられ、これによればa種は本類の中で古相を呈するものと言えよう。

一方a種以外の、口縁部に1条～4条の沈線・隆線帯がめぐる深鉢・浅鉢等は、長野県離山遺跡・長野県水遺跡・長野県荒神沢遺跡・長野県御社宮司遺跡出土土器などに類例がみられる。また、口径の小さなものをここでは壺としたが、46のような口縁部が内傾する形態のものは、長野県御社宮司遺跡出土土器などにみられる。口縁は平縁、突起のつくもの、凹みが施されるものなどがあり、口縁部形態を含めいづれも前記の長野県各地の遺跡出土土器に類例がみられる。本類とした無文土器も同様である。ただし、浅鉢の内口種としたものは、群馬県千綱谷遺跡出土土器に類似したものがあり、古相を呈するのかもしれない。

いづれにしても、2類とした一群の土器は、中部地方水Ⅰ式の範疇に入るものであろう。

3類は、東海地方西部に脈絡をもつ条痕文土器である。1～8にみられる口縁に沈線・隆線帯がめぐる形態のものは、愛知県下り松遺跡出土半精製土器・神奈川県杉田遺跡出土粗製土器に類例がみられる。口縁に無文部位がありそこから下部に条痕を施すもの(19～29)は、愛知県西浦遺跡出土土器に類似がみられる。条痕の方向は、口縁部付近は横位、胴部は斜位の傾向が窺えるが、9に代表される縦方向の条痕文は東海地方西部樫王式の段階になって出現する。しかしながら、樫王式に顕著とされる口縁端部の面取り手法は、本類には少ないようである。31～39にみられる稲妻文乃至蛇行文は、長野県水遺跡・長野県御社宮司遺跡出土の深鉢に類似し、神奈川県杉田遺跡出土粗製土器にも若干認められる。30は口縁部が外反し、口唇部に指頭圧痕を施すもので本類の中では後出的なものであろう。

3類は以上のように純然たる樫王式とは言えないが、東海地方西部に祖源をもち、樫王式に併行する一群ととらえておきたい。

4類は、凸帯文土器の一群である。口縁内面に横位の条痕が施されるもの(2・3)、口縁端部が面取りされるもの(8・9)などがあり、いずれも口縁部に指頭圧痕等による刻目をもつ太い凸帯がめぐる。この凸帯は樫王式に特徴の断面三角形形状を呈するものではなく、本類は東海地方水神平式に併行するものであろうか。

以上第8群土器について類別に編年の位置づけを試みてきたが、次に県内における縄文時代晩期後半～弥生時代中期初頭のなかでどのように位置づけられるのかみてみよう。

2 山梨県における土器の推移

本県における弥生文化波及期の研究は、県内における縄文時代晩期後半～弥生時代中期初頭の遺跡を網羅した中山誠二氏の詳細な論考があり、それを参考に八ヶ岳山麓・甲府盆地周辺といった近隣地域と本遺跡出土の土器を簡単に比較してみよう。

大泉村金生遺跡2号配石は、T字状文を有する浅鉢、北九州地方夜臼式に脈絡のある肩部が「く」の字形に屈折する深鉢、東海地方西部五貫森式併行の浅鉢、中部地方水I式の深鉢などが出土し、縄文時代晩期中葉後半～後葉前半に位置づけられる。同じく金生遺跡A地区17号住居址出土土器は、浮線網状文の施される土器、凸帯文土器、口縁部に沈線・隆線帯のめぐる深鉢などで特徴づけられ、中部地方水I式・東海地方西部樫王式に併行するものととらえられ縄文時代晩期後葉後半に位置づけられる。長坂町柳坪遺跡A地区16号住居址出土土器は水神平系条痕文土器を主体とするものであり、敷島町金の尾遺跡出土土器は水神平式条痕文土器であり、縄文時代晩期終末～弥生時代中期初頭の過渡期に置かれる。これらに続く弥生時代中期初頭の遺跡は、八ヶ岳南麓では大泉村寺所遺跡2号土城、甲府盆地周辺では中道町米倉山B遺跡が位置づけられている。

本遺跡出土の第8群土器は、1で述べた如く東北地方大洞A式、中部地方水I式、東海地方西部樫王式～水神平式に位置づけられるものであり、金生遺跡2号配石出土の縄文時代晩期後葉前半期の土器に続き、同A区17号住居址出土土器にはば併行する位置づけがなされよう。

また、甲府盆地西北端を占める本遺跡の立地場所から言えば、金の尾遺跡に先行するものとして位置づけられようか。

ここで中山氏の提示した縄文時代晩期後葉～弥生時代中期初頭の土器編年に本遺跡を組み入れてみると、八ヶ岳南麓では金生遺跡2号配石一金生遺跡A区17号住居址-柳坪遺跡A地区16号住居址-寺所遺跡2号土壇と変らず、甲府盆地周辺では未だ縄文時代晩期後葉前半を空白とし、中道遺跡-金の尾遺跡-米倉山B遺跡という変遷過程がたどれることになるのである。

次に、本遺跡出土第8群土器の編年の位置づけを踏まえて、本遺跡の所在した藤井平における弥生文化の波及を考えてみたい。

3 藤井平における弥生文化の波及

本県における弥生文化の伝播は、八ヶ岳山麓及び富士山麓を越えて入ってくる2つのルートが考えられており、峡北地方においては、東海地方西部の条痕文を主体とする土器をもつ文化が、天竜川沿いに伊那谷を北上し八ヶ岳山麓へ至るというものである。

このルートによって、峡北地方（八ヶ岳南麓）においては、金生遺跡2号配石出土土器にみられるように、東北地方大洞C2式段階に西北九州で始まった弥生時代に使用された土器の影響が見い出され、縄文時代晩期後半には弥生文化の洗礼を受けていたと思われる。

この縄文時代晩期後半における遺跡の立地は、低湿地を包含する低地、尾根に挟まれた谷などに所在する傾向があり、これは多分に水稲耕作にかなった立地条件ではあったが、八ヶ岳南麓ではまだ定着するには至らなかった。それは中山氏の指摘しているように、八ヶ岳南麓などの高所は現在もそうであるように当時においても寒冷地であったため、水稲に対しては劣悪な気候条件となりその定着を許さなかったことによるものである。水稲耕作に代表される弥生文化を受け入れるには、該地ではいましばらくの時間が必要であった。

八ヶ岳南麓に入った弥生文化の波は、東北地方大洞C2式に続く大洞A式・中部地方米I式の段階には八ヶ岳台地下の藤井平に及んで来た。ほぼ同時期の金生遺跡A区17号住居址は石囲いの住居址であり、金生遺跡全体を眺めてみると配石などの祭祀遺構があり、特殊なあり方を示しているものの、石を用い石を主体とした集落構造が窺える。しかし、本遺跡では第8群土器に伴い配石と認められるような遺構は検出されず、遺構としての石の使用はまったく無かったと思われる程であり、また、条痕文土器を出土した4号住居址は石を使用しない単なる竪穴式住居址となっている。これはどういうことを物語っているのだろうか。

縄文時代晩期中葉後半大洞C2式段階で弥生文化が八ヶ岳南麓に波及したが、それはそれまでの縄文文化を凌駕するには至らず、縄文時代晩期後葉になっても、なお、当該地域は、石囲い住居址にみられるような、縄文時代晩期に特徴的な石を主体とした縄文文化の延長線上にあるものであった。ところが、藤井平においては、縄文時代晩期後葉の段階には、塩川右岸の氾濫原である肥沃な低湿地を背景として、恵まれた自然条件のなか、遺構に石を使用することに象徴される縄文文化の伝統を切り捨て、水稲耕作が進展していったものと考えられ、弥生文

化は急速に普及・定着していったととらえられるのである。すなわち、藤井平においては、八ヶ岳南麓を中心に展開される縄文文化に決別し、いち早く水稲耕作を導入し開墾の手が入ったのであり、遺構にみられる形態差がそれを如実に反映しているのである。そして、この弥生文化の波及・定着への一大画期が、藤井平においては縄文時代晩期後葉後半にあったと考えられるのである。

4 おわりに

中遺跡出土の縄文時代晩期後半～末葉の土器群について、編年的位置づけを検討し、藤井平における水稲耕作に代表される弥生文化の波及を考えてきた。しかし、その編年的位置づけは、土器群の詳細な分類を含み今後さらに検討の必要があろう。編年を踏まえた藤井平における弥生文化の波及も尚内考を要するものである。また、該期においては、土器組成の変化が如実にその背景となる文化の変容を映し出すとされるが、本報告においては器種構成が明確にされず、土器組成の面からの比較検討がなされず非常に曖昧なものとなってしまったことを深く反省する。さらに、直接に生産活動にかかわるような遺物（生産用具）等についても言及がなされず、今後に残された課題は大きいと言えよう。しかしながら、本資料は甲府盆地周辺部における弥生文化の波及・定着を考慮する上で貴重な一石を投ずるものと信じる。先学諸氏の御批判を賜りたい。

なお、文章中には註をつけなかったが、引用・参考文献として別にしめす。

最後に、本報告書を執筆するに当たり、文献・助言等でお世話になった、末木健・新津健・小野正文・山路恭之助・深沢裕三・中山誠二・畑大介・榑原功一の名氏に厚くお礼を申し上げます。

〔引用・参考文献〕

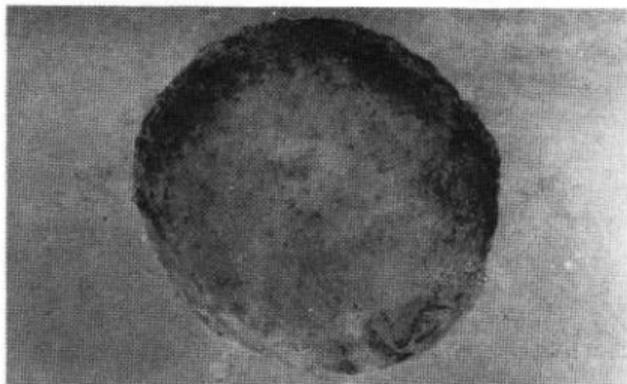
- 川勝政太郎 「日本石造美術辞典」 東京堂出版 1978
- 土井 卓治 「石塔の民俗」『民俗民芸双書』73 岩崎美術社 1972
- 坂本 美夫 「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古 第21号 シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古同人会 1986. 2
- 田口 昭二 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No. 211 ニューサイエンス社 1982
- 杉原荘介・戸沢充則 「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第2巻第1号
- 永峯 光一 「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』No. 9
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎 「次城原殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』第4巻第3号
- 大参 義一 「縄文式土器から弥生土器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研

- 藤沢宗平ほか 『麓山遺跡』 長野県安曇郡穂高町教育委員会 1972
- 安孫子昭二 「縄文式土器の型式と編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣選書 1978
- 春成 秀爾 「縄文時代の終焉」『歴史公論 2 縄文時代の日本』第5巻2号 雄山閣 1979
- 戸沢 充則 「縄文農耕論」『日本考古学を学ぶ』(2) 有斐閣選書 1979
- 小林秀夫・百瀬長秀ほか 「御社宮司遺跡」『長野県中央遺埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
- 設楽 博己 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号
第4回三県シンポジウム 「東日本における黎明期の弥生土器」 北武蔵古代文化研究会・
千曲川水系古代文化研究会・群馬県考古学談話会
- 百瀬 長秀 「浮線文系土器の変遷と分布」『歴史手帖』14巻2号 名著出版 1986
- 座談会 「ハケ岳南麓・金生遺跡と縄文晩期の地域的諸問題」『季刊どるめん』29 1981
- 新津健 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター 1983
- 新津健 「ハケ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21-2 1984
- 中山誠二ほか 「〔座談会〕山梨県考古学の現状と課題」『甲斐路』季刊№52 1984
- 中山誠二 「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要』2 山梨県立考古博物館 山梨県
埋蔵文化財センター 1985
- 鈴木義昌編 『日本の考古学Ⅱ縄文時代』 河出書房新社 1966
- 和島誠一編 『日本の考古学Ⅲ弥生時代』 河出書房新社 1966
- 澄田正一ほか『新編一宮市史 本文編上』 1977
- 芹沢長介・坪井清足監修 『縄文土器大成』第1巻～第4巻 講談社

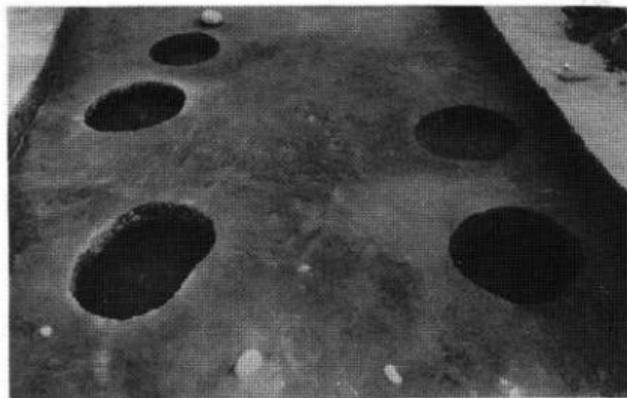
金山遺跡遠景



金山遺跡
1号土壇



金山遺跡
2~6号土壇





金山遺跡発掘風景



14



15

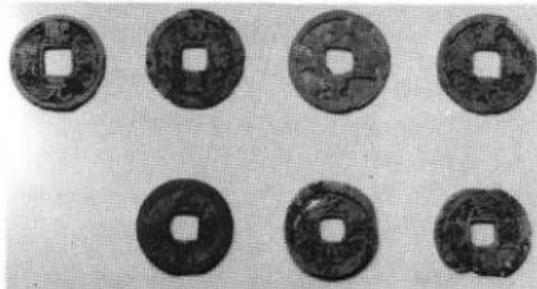


17



19

金山遺跡出土遺物



金山遺跡出土古銭



金山遺跡石塔他





下木戸遺跡配石



2



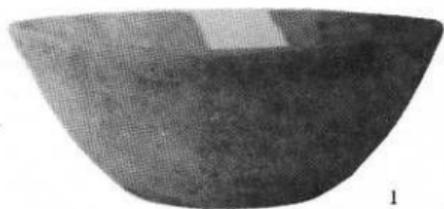
3



4



5



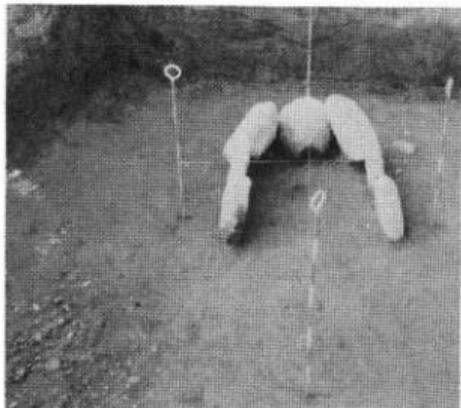
1



6



7



下木戸遺跡出土遺物



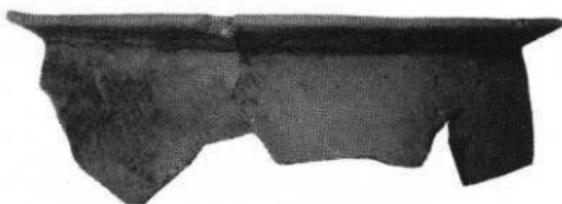
8



9



10



12



13



11

下木戸遺跡出土遺物

中道遺跡遠景



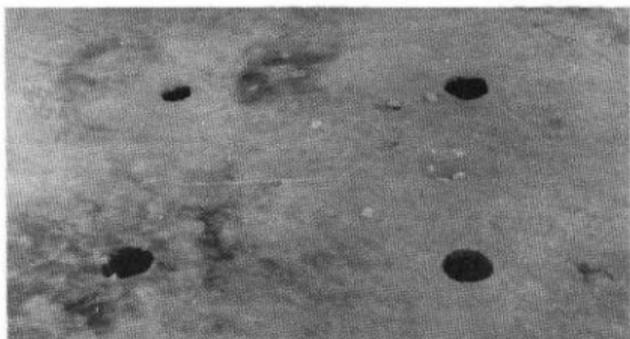
中道遺跡
1号住居址



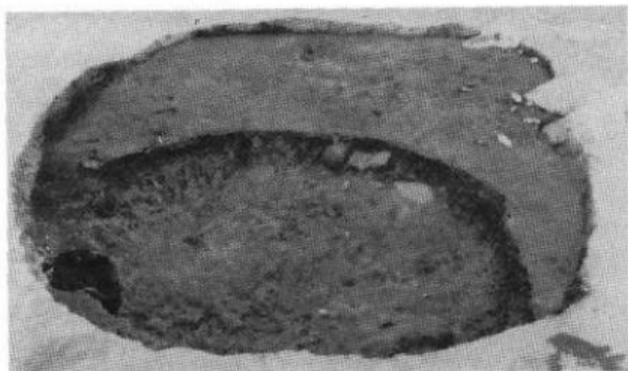
中道遺跡
1号住居址
カマド



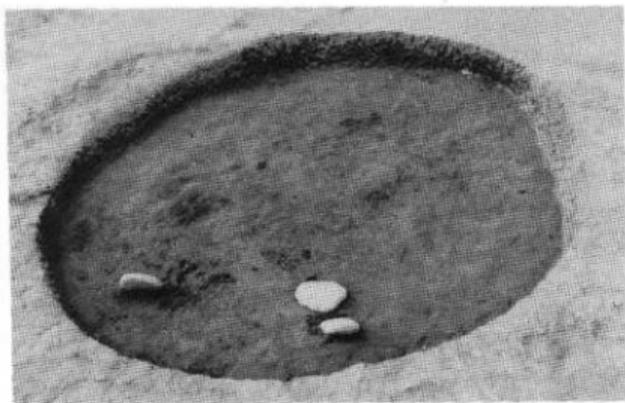
中道遺跡
2号住居址



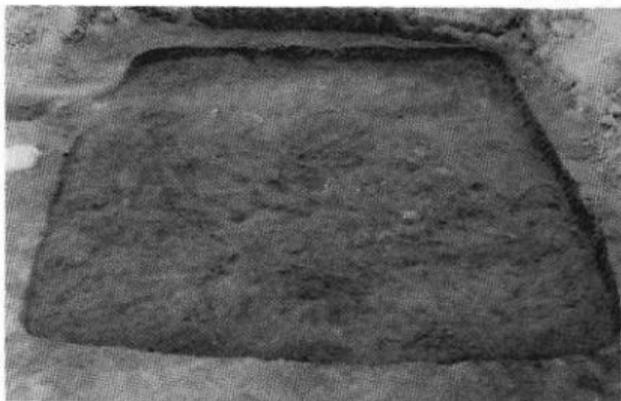
中道遺跡
3号住居址



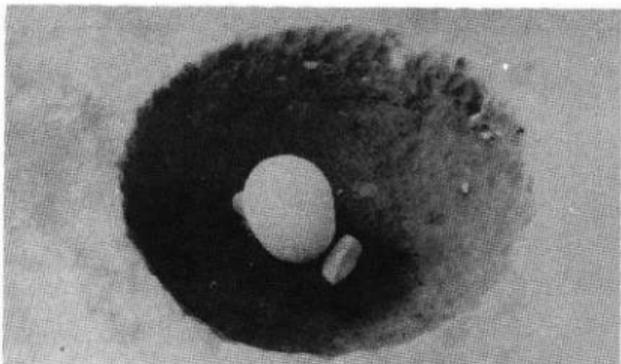
中道遺跡
4号住居址



中道遺跡
5号住居址

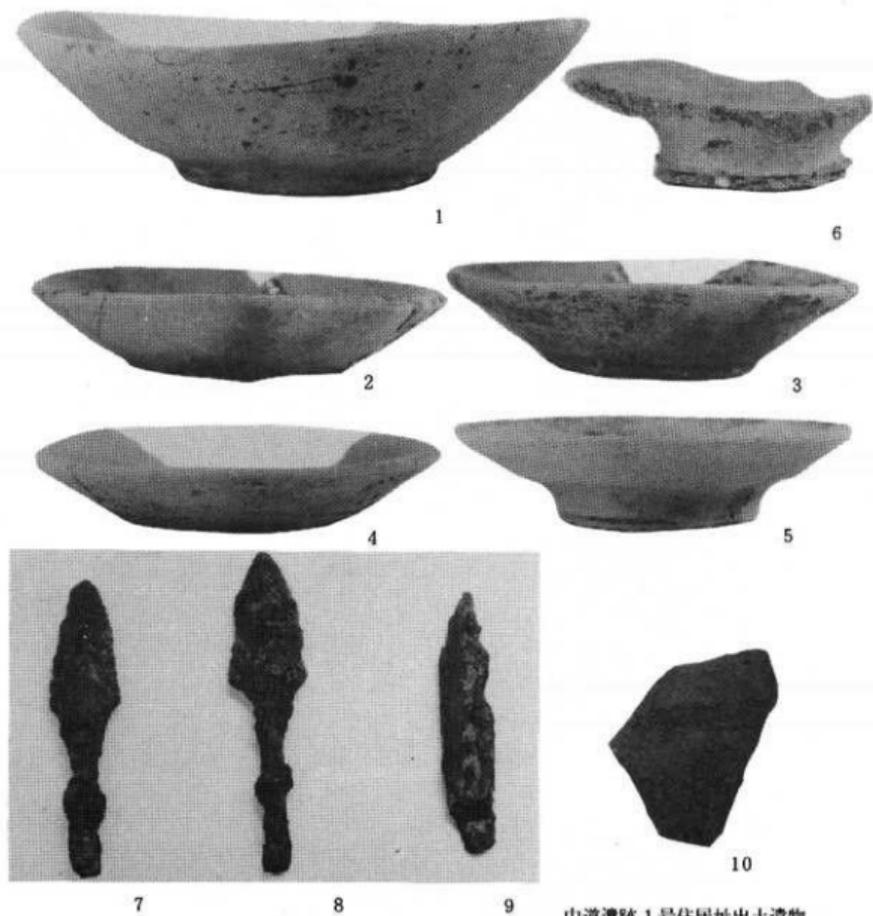


中道遺跡土坑



中道遺跡集石遺構





中道遺跡 1号住居址出土遺物



中道遺跡 2号住居址出土遺物



1



5

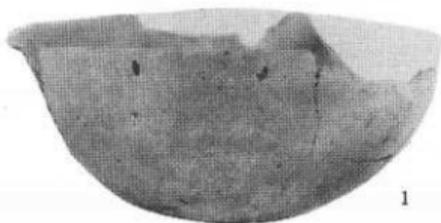


3



4

中道遺跡 3号住居址出土遺物



1



3



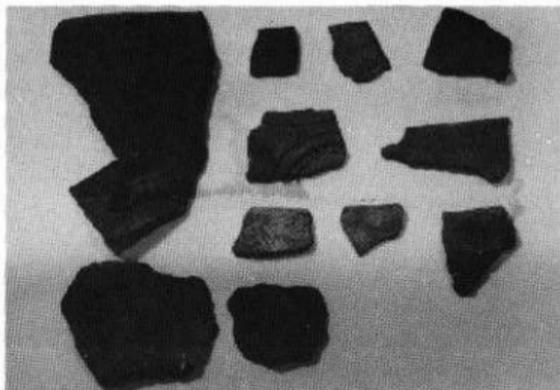
4

中道遺跡 4号住居址出土遺物

中道遺跡 5号住居址出土遺物



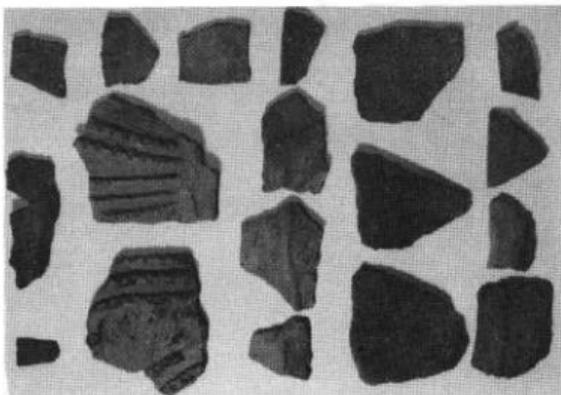
1



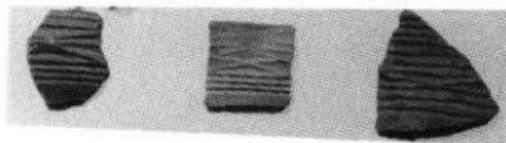
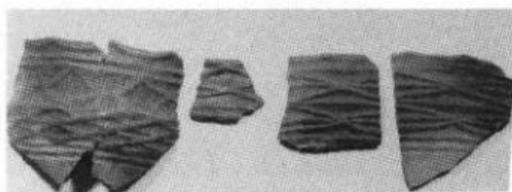
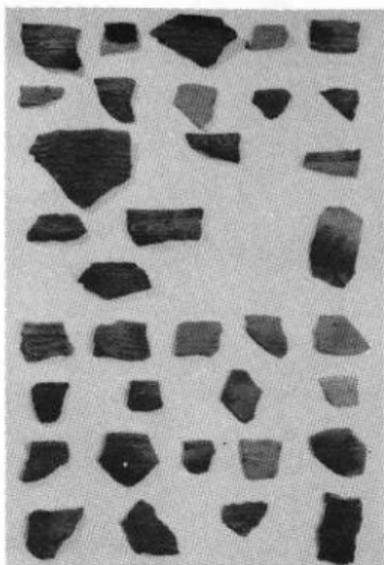
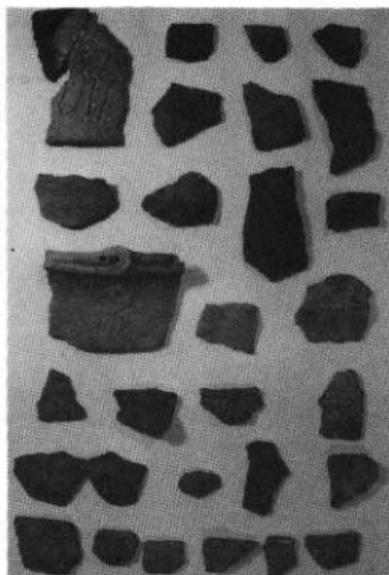
中道遺跡
集石遺構出土遺物



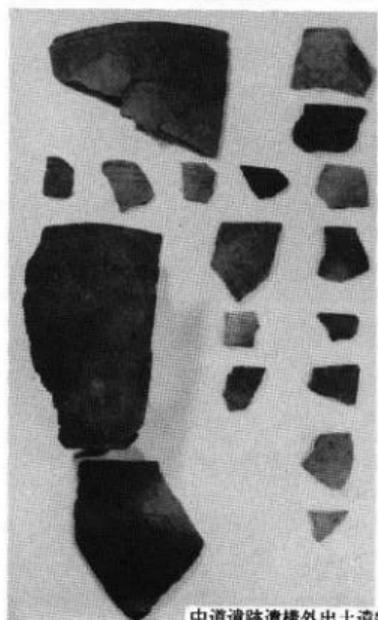
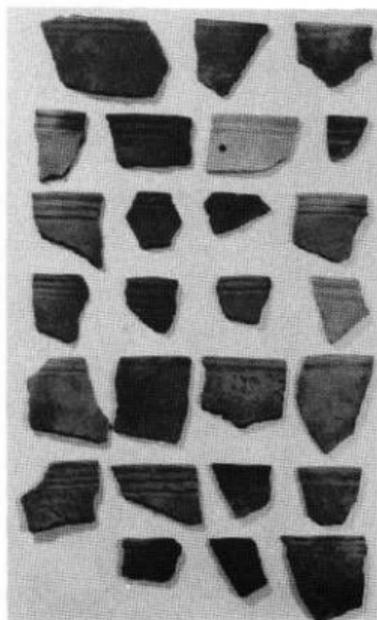
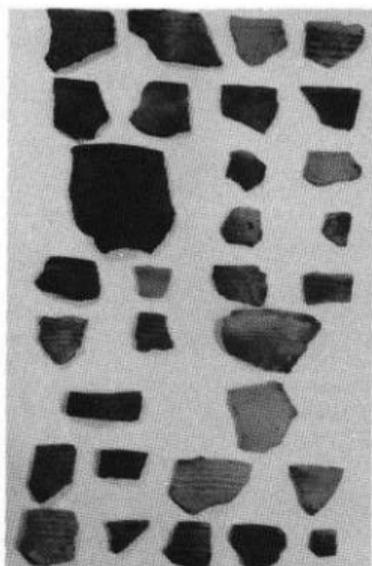
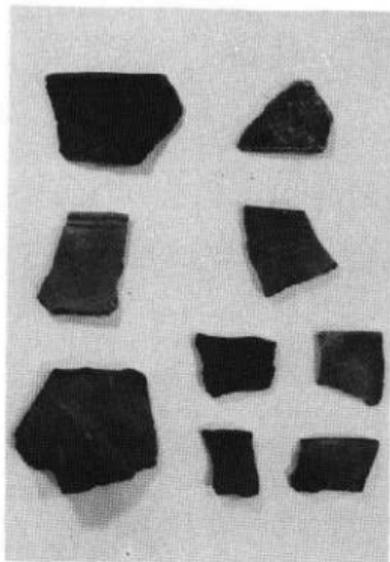
中道遺跡
発掘風景



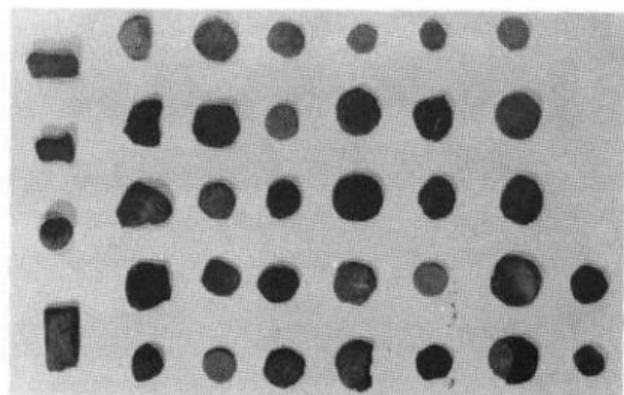
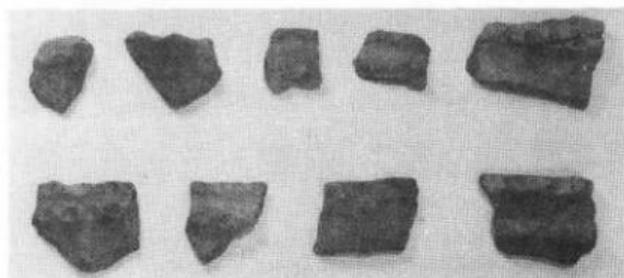
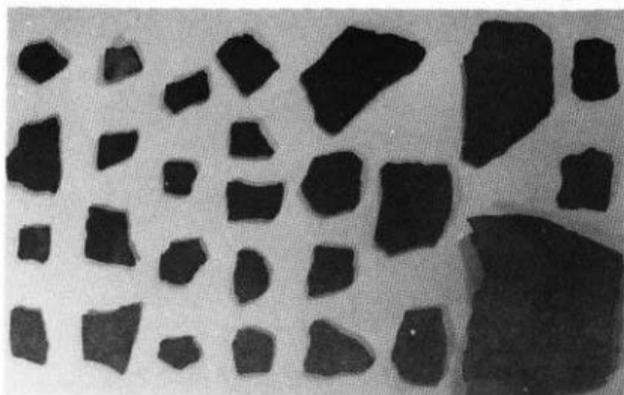
中道遺跡
遺構外出土遺物



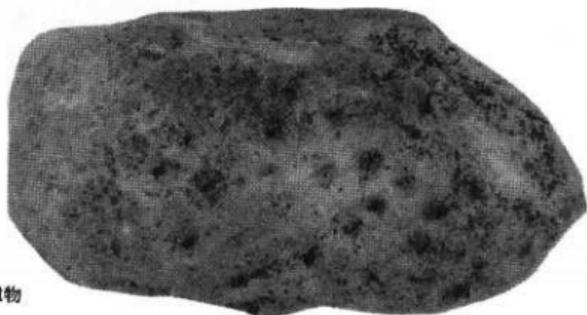
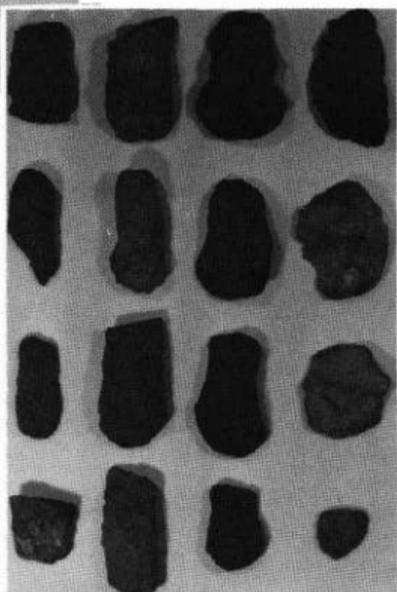
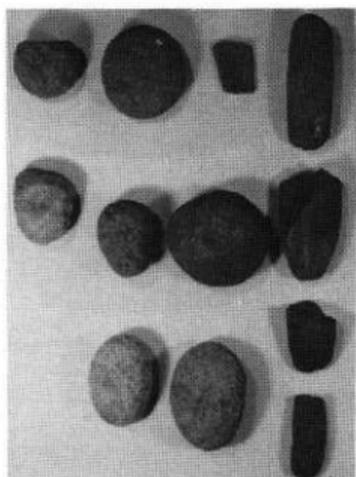
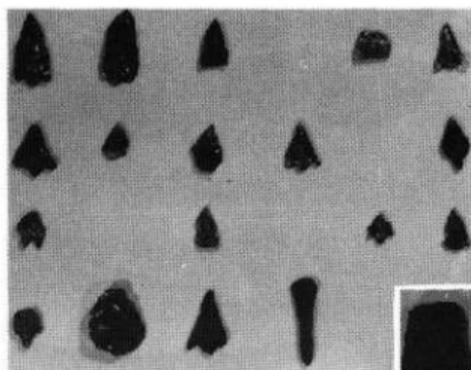
中道遺跡遺構外出土遺物



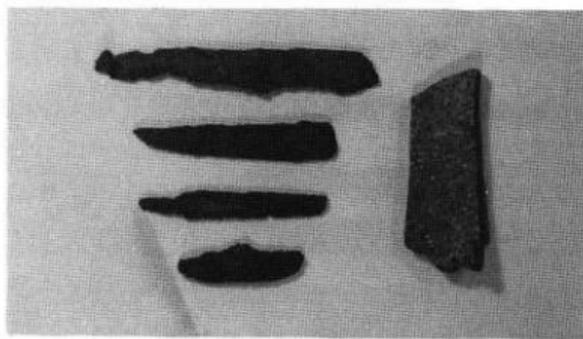
中道遺跡遺構外出土遺物



中道遺跡
遺構外出土遺物



中道遺跡
遺構外出土遺物



中道遺跡
遺構外出土遺物

金山遺跡
下木戸遺跡
中道遺跡

発行日 昭和61年3月31日

発行 韮崎市教育委員会
〒407 山梨県韮崎市水神一丁目3番1号
TEL 0561-22-1111 (代)

印刷 アートプリント社

